

考えるということ

街へ、時代へ、跳びだした **東北大学文学部**
ブックレット

ISSN 1882-434X
東北大学文学部・文学研究科
June 2012 Vol. **7**

この本の立場▶実利偏重・通俗功利主義がはびこる時代、東北大学文学部・文学研究科は、あえて「人文知の価値」を示したいと思います。この本は、軽微浮薄な文化への対立軸としての重厚な伝統的学問文化を守り、発展させる媒体です。現実の問題から目をそらすではありません。「企業の社会的責任」を意識する先進的な企業と対話・連携し、あるいは書店や図書館、地域社会との対話を通して、人文社会学的立場から、責任を持った発言をしていきます。さらに、大学で学びつつある、あるいはこれから大学で学ぼうとする若い世代に、「真の実学」としての人文社会学の心髄を伝えたいと思います。ネットを中心に、匿名性を隠れみのとした無責任な発言が、なんとあふれかえっていることでしょうか。この本では、研究者・高校生・大学生・卒業生・企業・地域社会を結んで、＜文学部流＞を徹底したらこうなる、という情報の発信をめざしていきます。

3つのシリーズ特集

シリーズ企業との対話・社会との対話 6

東北放送(株)との対話

3・11東日本大震災から

リスク・コミュニケーションの “これから”を考える

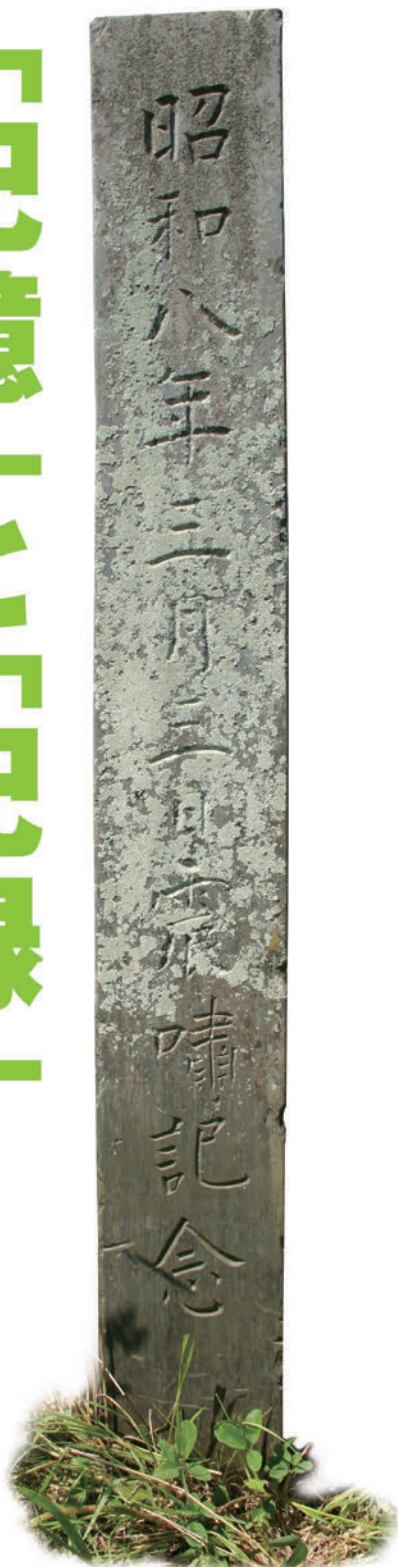
2

東北大学文学部の歴代研究者メモリアル 7

実証的な文献批判にもとづく
中国思想史研究を確立した **武内義雄博士**

文学部の研究紹介 7 英文学 **岩田美喜** 准教授 19

イエイツ・シングダからシエリダン父子へ
アイルランド演劇の研究



「記憶」と「記録」

2011年3月11日、東日本大震災により東北・関東地方の太平洋沿岸地域は未曾有の惨事となった。「想定外」の大規模災害ともいわれたが、徐々に、貞観津波(869年)、慶長津波(1611年)、寛政津波(1793年)、明治三陸津波(1896年)、昭和三陸津波(1933年)などの被害を記した碑や記録の存在が想起され、「仙台平野の歴史津波」(1995年)、「津波の恐怖」(2005年)、「津波でんごん」(2008年)などの地元の出版物があったことも明らかになった。記憶はすぐに薄れてゆく。それゆえに記録は不可欠である。しかし、記録があることもまた記憶から消えていく。どうすれば記録は現実を動かして、役立つ情報となっていくのか。記録を保持し広めて行くための新たな方法、方策が今、求められている。(写真は、仙台市から名取市へ流れくだる名取川右岸、名取岡上地区の堤防に建てられた昭和三陸津波の到達点を示す碑。海岸から2km余の場所にある)

広く、深く、高く!!多彩なシリーズ

図書館・書店との対話 7

あゆみブックス仙台店との対話

10

文学部へ行く 7 文学部のニュース&インフォメーション

26

3・11東日本大震災を経て、 書籍への関心も変わってきたか!?

文学部ゆかりの宝もの 7

北から見た日本史・
日本文化研究を支える

秋田家史料

32

3・11東日本大震災から リスク・コミュニケーションの “これから”を考える



文学研究科
正村俊之教授(社会学)



TBC東北放送(株)
氏家悟取締役営業局長

2011年3月11日、三陸沖を震源地とするマグニチュード9.0の大地震で発生した津波により、東北・関東地方の太平洋沿岸地域は壊滅的な打撃を受けました。東京電力福島第1原子力発電所のメルトダウンも加わり、未曾有の被災状況となりました。1年余を経過した今も、復旧・復興は遅々として進んでいないというのが実情でしょう。

3.11直後、生活インフラの破壊により、多くの人がテレビ、ラジオ、新聞、雑誌等からの情報入手が困難になりました。改めて、マスメディアの必要性和同時に、その弱点も意識されたのではないのでしょうか。

宮城県をエリアとするテレビ放送局は、NHK仙台放送局のほか、東北放送(TBC)、仙台放送(OX)、宮城テレビ放送(MMT)、東日本放送(KHB)の4局があり、TBSはラジオも兼営しています。これらの電波媒体は、3.11直後から、どのような働きをしてきたのでしょうか。そこには、どんな問題があったのでしょうか。3.11以後へ向けて、どんなことが考えられなければならないのでしょうか。

1951年に開局し(当時は、仙台放送株式会社)、宮城県、ひいては東北地方で最初にテレビ放送を始めたTBCの放送人を招き、文学研究科で「リスク・マネジメント」「リスク・コミュニケーション」に詳しい社会学者が語り合いました。

信頼感を強めた 3.11直後の マスメディア



正村 社会学の立場から見て印象に残ったことは、震災が社会を映し出す鏡のような役割を果たしたということです。震災をとおして日本の社会に潜んでいる様々な問題が浮かび上がってきました。過去にも大地震が社会の在り方を変えた例はありましたが、それは、地震をとおして人々が問題に気づき、認識や行動の在り方を変えたからだと思います。東日本大震災も日本の社会を変える可能性があります。そうなるかどうかは、私たちが震災から何を学ぶのかにかかっています。

まず、震災からの1年を振り返ってみましょう。被災地のメディアとしてご苦労なさったのではないのでしょうか。

氏家 宮城県沖地震があるものだという認識はありましたし、地震が起こったときにどういうことを放送すべきかというコミュニケーションもしていました。マニュアルをつくり、訓練もしていました(右参照)。

しかし、今回の震災は、考えていたレベルをはるかに超えていました。たとえば津波に関して言えば、昔、津波があったという話は何度も聞いていましたし、仙台空港に津波がくると指摘していた研究者の話も聞いていました。しかし、実際に起こったものは、

■ 3.11からの数か月 (河北新報社『東日本大震災 全記録』等より)

3月11日	14時46分頃、巨大地震発生。宮城県栗原市で震度7を記録 14時49分、気象庁が青森～千葉の太平洋沿岸に大津波警報発令 14時50分、政府が危機管理センターに官邸対策室を設置 14時52分、岩手県知事、次いで宮城県、福島県、青森県知事が陸上自衛隊に災害派遣要請 15時04分、仙台空港で飛行機の離発着停止。JR東日本管内の新幹線運休 15時18分～50分、宮古、釜石、大船渡、石巻、相馬などに津波の最大波 15時44分、東北6県で約465万戸停電 16時12分、全閣僚出席の緊急災害対策本部会議 19時03分、政府が東京電力福島第1原発に関して「原子力緊急事態宣言」 21時23分、菅首相が福島第1原発の半径3km以内の住民に避難指示
	
3月12日	福島第1原発1号機で水素爆発 避難指示区域を半径20kmに拡大
3月13日	菅首相、自衛隊の災害派遣10万人態勢を指示
3月14日	福島第1原発3号機で水素爆発 2号機で圧力容器の水位が低下し、東京電力は海水の注入を開始 東京電力、計画停電を開始
3月15日	福島第1原発4号機で出火
3月16日	天皇陛下が国民向けメッセージをビデオで語られた
3月17日	陸上自衛隊のヘリで福島第1原発3号機に水投下
3月22日	東北新幹線盛岡～新青森間運転再開
3月23日	仙台市ガス局が一部地域で供給再開
3月24日	東北自動車道一関～宇都宮間で一般車両の通行可能に
3月30日	東京電力会長、福島第1原発1～4号機の廃炉を表明
4月4日	東京電力が福島第1原発の放射性物質を含む汚染水を海中に放出
4月7日	23時32分頃、宮城県北部・中部で震度6強の余震
4月12日	原子力安全・保安院が福島第1原発事故を「レベル7」に評価
4月13日	仙台空港が一部国内線の運航再開
4月14日	政府の復興構想会議が初会合
4月16日	仙台市ガス局が東部沿岸地域などを除き都市ガスの復旧作業終了
4月17日	東京電力が福島第1原発事故の収束工程表を発表
4月21日	JR東北本線全線復旧
4月22日	福島第1原発周辺20km圏内を住民立ち入り禁止の「警戒区域」に設定
4月29日	東北新幹線全線復旧 仙台市地下鉄全面復旧
5月3日	陸上自衛隊が福島第1原発10km圏内で不明者捜索を開始
5月12日	東京電力が福島第1原発1号機のメルトダウンの可能性を認める
5月14日	TBC「TBCルポルタージュ“震災の記憶”」放送開始(～2012年3月7日)
5月15日	「計画的避難区域」に指定された福島県飯館村で避難開始
5月24日	東京電力が福島第1原発2、3号機もメルトダウンの恐れと発表
5月28日	TBC「ウォッチン! プラス～絆みやぎ～」放送開始
6月6日	原子力災害対策本部が福島第1原発1～3号機の「メルトスルー」の可能性報告
6月20日	復興基本法成立
6月25日	復興構想会議が「復興への提言」を菅首相に答申
7月6日	海江田万里経済産業相が「原発ストレステスト」の実施を表明

■ 3.11直後のTBCの動き (TBC「2011.3.11 東日本大震災 東北放送の記録」より)

テレビ	ラジオ
3月11日	
14:46 緊急地震速報スーパー・チャイム 「宮城沖で地震 強い揺れ 宮城中部 宮城北部 宮城南部」	緊急地震速報
14:48	地震放送
14:49	震度情報
14:50 大津波警報地図SP開始	大津波警報呼びかけ
15:03 EWS(緊急警戒放送)発信	EWS(緊急警戒放送)発信
15:06 津波への警戒 余震への注意呼びかけ 震度情報のお知らせ	津波への警戒 余震への注意呼びかけ 震度情報のお知らせ
15:21 女川情報カメラ	女川情報カメラ
15:25	津波への警戒 余震への注意呼びかけ 震度情報のお知らせ
15:47 ローカルL字画面開始	
15:57 仙台空港情報カメラ	仙台空港情報カメラ
16:12	津波への警戒 余震への注意呼びかけ 震度情報のお知らせ
16:38 仙台駅前中継	
3月12日	
4:37	荒井ラジオ送信所停止
5:30	八木山非常用ラジオ送信機から電波発射
早朝	鳴子ラジオ中継所、電池容量枯渇により停波 志津川ラジオ中継所、電池容量枯渇により停波 NTT八木山の通信ダウン 本社内の通信の多くが停止
10:00頃	
3月13日	
20:25 大年寺山デジタル送信所復電	
21:44 本社復電	
3月15日	
1:00頃	NTT八木山通信回復
12:50	荒井ラジオ送信所復旧
3月17日	
21:00 レギュラー番組復帰	
3月18日	
14:30	気仙沼ラジオ送信所、燃料枯渇により停波
17:00	荒井ラジオ送信所復電
3月22日	
6:29 CM復帰	CMなしでの24時間放送体制終了
4月4日	
基本はレギュラー編成に復帰	テーマ音楽含め通常に復帰
4月7日	
23:32 宮城県沖M7.2の地震で震度6強 翌2:38まで報道特番	翌3:00まで報道特番



最初の中継は仙台駅前から(3月11日)

私たちが想定していたものとはまるで違うものでした。想定していたものの、準備していたものではまるで足りない、いま持っているものを根底から変えないと対応できない、というものでした。

まず、起こったことを伝えなければならぬわけですが、何が起こったのがわからない。200人くらいの遺体があるという情報が流れたことがあります、本当なのか。検証しようにも、そこへ行くことができない。誰かが言っていたらしい、警察が言っていたらしいが、分からない。何が起こってそうになっているのかも、分からない。……といった状態です。

必要なことを一生懸命伝えようとしていましたが、結果として、何も伝えられませんでした。どうやって検証し、どうやって伝えたいのか。今までやってきたことは何だったのかと考えさせられました。全国から応援がきて報道してくれたのですが、地元メディアとして知っていなければならぬ情報を得られず、状況を分かっていることがないのが実感です。

正村 私は阪神・淡路大震災も経験しましたが、どちらの時も、震災直後、メディアからの情報が遮断され、自分が直接見聞きできる範囲のものしか認識できませんでした。二度の被災体験とおして、私たちが現実を認識するうえでいかにマスメディアに頼っているかを痛感しました。

震災後、野村総合研究所がメディア利用に関して行った調査によれば、被災後の状況をj知る上で有効な情報源となったのはマスメディアでした。第一位がNHK、第二



Ujiie Satoru 1957年生まれ。宮城県出身。東北大学文学部卒業後、TBC入社。2008年、テレビ局長、2009年、報道制作局長、2011年、営業局長就任。3.11直後は報道制作局長として、震災による放送システムへの被害などもある中で、被災地におけるマスメディアとしての災害対応に邁進した。

位が民放でした。この調査が行われたのは震災の約一週間後ですので、原発報道が評価の対象に含まれていないことを考慮する必要がありますが、マスメディアへの信頼の高さが示されています。

震災のような災害時には、三つのタイプの情報が必要になると思います。一つ目は、地震の規模や被害の状況を知るためのマクロ情報。二つ目は、被災者の多様なニーズ（安否確認や生活物資情報）に応えるためのミクロ情報。そして三つ目は、マクロ情報とミクロ情報の中間として、組織間の連携をはかったり、ヒトやモノの流れをコントロールしたりするためのミドル情報です。マスメディアが強みを発揮するのは、何と言ってもマクロ情報の伝達ですが、ローカル局は被災者に近い立場にいますので、ミクロ情報やミドル情報の伝達においても一定の貢献ができたのではないのでしょうか。

氏家 実際は、状況を伝える部分において遅れていた、思っていたようにはいかな

ったという実態でした。

たとえば、南三陸で多くの人が見つかっていないという情報がありました、現場に行けたのは翌日朝であり、中継ができて初めて状況が分かったのです。実際何が起こっているのか、どうなっているのか、そこからのスタートであって、状況を伝えるのは現実には非常に難しかったのです。

仙台空港に津波がくる映像を見て、大変なことが起こったということを知ったという方は大勢いらっしゃると思います。しかし、私たちにもそれ以上のことは分かっているなかったわけで、情報を伝える点では足りないところが多々ありました。

ただ、ミクロの部分ではそれなりのことができたように感じています。特にラジオでは、24時間放送の中で個人の情報にかなりの時間を割くことで、「私は無事です」など、いただいた情報により個人に特化した情報を出すことができました。ソーシャルメディアも取り入れ、ツイッターにつぶやかれていた情報を紹介することもしました。もちろん、どこまでを伝えていいのか分からないという問題はありました。何人かの人が亡くなっているようだという情報をもらったことがあります、確認できない。その場合には、情報そのものをなかつたことにするのはなく、「確認できないので、確認をとってから伝えます」といった言い方をしました。ミクロの情報をどう伝えるのか、個人的な情報をどう伝えるのか、それを考え、実行していくのがローカルの立ち位置、役割だと思いました。

正村 阪神・淡路大震災と今回の震災では、

メディア環境の違いがあります。阪神・淡路大震災が起こった1995年はインターネット元年にあたりますが、正確にいえば、インターネットが普及する直前でした。それに対して、今回は、ソーシャルメディアという、インターネットを基礎にしたメディアが利用されました。インターネットの特徴は、まずグローバルな性格にあります。その性格がよく現れたのが気仙沼の事例です。津波から逃れるために屋上に避難していた福祉施設の人たちは東京消防庁のヘリコプターで救出されました。それは、施設長の女性がロンドンにいる息子さんに送った救援のメッセージがツイッターを介して東京都の猪瀬副知事にまで届いたからです。現代の情報化社会を象徴する一例とも言えるでしょう。

インターネットのもう一つの特徴は、情報を双方向的に流せる点にあります。ソーシャルメディアは、ミクロ情報やミドル情報の双方向的な伝達において効果的で、被災者のニーズと支援者の物的・人的な支援をマッチングするのに役立ちました。今回の震災でNHKやTBCのような放送局がマスメディアだけでなく、ソーシャルメディアも利用して情報を流したことは画期的なことでした。

氏家 特にラジオでは、視聴者から情報をもらって流すなどネットワークでのやり取りもしました。テレビでも、キー局のネットワークを切つてTBC独自につくりあげている『ウォッチン！みやぎ（月・金、7時20分頃）』という朝番組で、「私立TBC気象台」といったコーナーを設け、県内各地から毎日の天気情報を頂くことなど、連携の積み重ね

はできていました。各地のコミュニティFMとも連携し、きめ細かな情報を提供してもらおう一方、コミュニティでは入りにくい全体的な情報を提供するなど、ネットワークを広げてきました。そのようなネットワークが、今回ずいぶん機能したと思います。TBC単独でできることを超えた要素がたくさんある中で、皆さんから得られる情報は貴重なものでした。しかし、そういう状況に慣れすぎていた面も否めません。ある時点で、電源と回線の問題から、往き来できなくなったのです。電源は、停電下で自家発電を使っていたわけですが、それが難しくなった。回線は、飛びかう情報量が急増し、電波が足りなくなったということです。通信網に頼りきっていたことを改めて気づかされました。情報インフラの問題は、また別に考えなければならぬのではないかと思っています。

正村 こ二十年くらいの間に放送のデジタル化が進み、テレビそのものが情報を双方向的に伝達できるようになりましたが、このような機能は今回の震災に役だったのでしょうか。

氏家 TBCでは、天気予報を放送局の柱として、独自の情報を提供しています。その中で、台風がきています、学校を休みにしますといった情報をいただけるシステムをつくってききました。その関係で、今回の震災でも情報をいただけました。そして、いただいた情報を画面で紹介したり、データ放送で紹介したり、L字で画面の一部に情報を提供したりしました。

何かがあったら情報を紹介してもらえ

という形ができあがっていたので、その外の情報も提供していただいたところがあります。開いているお店の情報をいただければ、買い物をするところがない、お店が開いてないという方にその情報を提供します。行ったら何もなくったといった場合もあつて伝える難しさもありましたが、丁寧に情報を流し、返すことで、新たな情報をいただけるという仕組みができたという実感はありました。

原発事故報道 には異論の 余地がある

正村 ところで、マスメディアとインターネットの間に、ある種の対抗的な関係も形成されました。特に、原子力発電所事故に



Masamura Toshiyuki 1953年生まれ。東京都出身。1995年東北大学文学部教授就任。コミュニケーション論、メディア論を専門とする。東日本大震災に関しては、田中重好・船橋晴後との共同編集で『東日本大震災と社会学—提起された(問い)をめぐって』(ミネルヴァ書房)を近刊予定である。

関する報道では、そういう関係が見られたように思います。震災直後から深刻な事態が続いていたにもかかわらず、マスメディアでは、事故を過小評価し、安全性を強調する情報ばかりが流れました。政府や東電の情報をもそのまま流すことが多く、事故の深刻さを伝えたのはだいぶ経ってからでした。

一方、ネット上では早くから事故の深刻さを伝える情報が流れました。そのため、マスメディアに対する批判が起こりました。**氏家** マスメディアの中に、原発の安全神話があるわけではありません。それよりも、私たちの側に原子力発電所についてのプロフェッショナルがいらないという問題だ、とは思っています。そのため、出てきている情報への検証ができず、どんな情報が出てきていないのかが分からない。たとえば水素爆発を、たまたまある局が撮影したので、初めてそういう問題があることを推測できました。また、電源喪失については、それで何が問題なのかを理解できる人間が局の中にもいませんでした。だから、情報がなければ取りに行く、調べに行くという状況にはなかったのです。政府や東京電力が出す情報をおいかけながら、どのようにすれば検証できるかを手探りしながら、走りながらやってきたのが現実です。成り行きでしか話を進められなかったのです。

もちろんTBCとしては、女川の原子力発電所に関しては東北電力との話の場をつくり、女川ではどのような状況だったのかを詳しく聞いていく中で、何もなかったわけではないけれど、全体としてはうまくコントロールでき、なんとか安全に停止でき

たといった話を引き出していました。

福島で起こったことについては、そこまでの理解があったのか、そこまでの報道ができたのかといえ、難しかった。専門的な内容について分かる人の意見をいろいろと掲載していたネットの情報の方が的を射ていたと言えるのではないのでしょうか。

正村 日本には「記者クラブ制」という独特の制度がありますが、政府や東電の情報をそのまま流したことに限っては、記者クラブ制に原因の一端があるとは言えませんか。また、今回の原発事故に関しては、「原子力ムラ」と呼ばれる「産・学・官」の癒着的構造が問題になっています。放送局や新聞社も電力会社から多額の広告費を得ていたために、電力会社を批判しづらかったということはありませんか。

氏家 記者クラブに所属していて、記者クラブを外から見るということを意識したことがなかったのだ、あまり深い答えになりにくいところがあります。政策遂行側と深くつき合っていると、特権的な待遇を受けているとかの見方があることは知っています。特にフリーのジャーナリストの皆さんには強いのでしょうか。しかし、中にいるものにとつては、そこまでのものではないという意識です。

しかし、今回のことと言えば、事故直後、枝野官房長官の記者会見などに同席していないので何とも言えませんが、一つだけ強く感じていることはあります。もっと違うことが聞けたのではないか、言えたのではないか、なせもつと突っ込まなかった、という思いです。私自身は、一度も記者クラブ

の閉鎖性を感じたことはありませんでしたが、私には分からないところで記者クラブの閉鎖性というものが、それで問えなかったのかという疑問です。

正村 今回の原発事故で信頼が揺らいだのはマスメディアだけではありません。科学や科学者への信頼も揺らぎました。まず、原子力利用に携わってきた科学者が「原子力ムラ」に組み込まれてきたという問題があります。しかし、今回の事故には、それにとどまらない、もっと根源的な問題が含まれています。それは、科学や科学技術そのものの対する信頼が揺らいだことです。

科学技術は、今や社会にとって不可欠なものです。科学技術には様々なリスクが内在しています。それが顕在化したのが今回の原発事故です。また、20世紀後半に登場した金融技術も広い意味での科学技術の一つですが、金融技術は、金融リスクを減らすために開発されたにもかかわらず、2008年の世界的金融危機を発生させる要因の一つとなりました。金融危機や原発事故をとおして、科学技術の利用の在り方、そして科学と社会の在り方が問われているように思います。

1970年代に、アメリカの核物理学者のアルヴィン・ワインバーグ(1915-2006)が「科学によって問うことはできるが、答えることはできない問題が増えていく」と語っています。科学技術の多くはこのような性格をもっています。たとえば、遺伝子組み換え技術が遠い将来どのような結果をもたらすのかは専門家にもわかりません。リスクを正確に把握できない以上、そうし

た状況のなかでリスクに対処するためには、どのような価値を選択するのが重要になります。原発事故に関していえば、いつ故郷に帰れるかが避難者にとって切実な問題となつていますが、この場合、リスク評価は、子供の命を優先するかどうかといった価値判断に左右されます。選択する価値に応じてリスク評価やリスクへの対処法が異なつてきます。ですから、リスク問題は科学者だけでは解決できません。科学コミュニケーション論という分野がありますが、この分野の専門家は、一般市民を含む、さまざまな利害関係者の双方向的なコミュニケーションによる意思決定の重要性を説いています。

これはマスメディアの在り方とも関連してきます。これまで科学とマスメディアは、社会の中で近い位置を占めてきました。どちらも世界の認識を目標とし、そうした活動に従事する専門家集団が科学者や放送局でした。そして、それらの専門家集団が生み出す知識や情報は公共的な性格をもち、媒体としてのマスメディアを使って無数の人々へと伝達されてきました。原発事故に象徴されるリスク問題は、このような情報

の一方的な流れのもつ限界を浮かび上がらせたのではないのでしょうか。

氏家 いま、裁判で検察などの問題が明るみに出ていますが、私たちが無意識に持っていた「無謬性」のようなものが揺らいでいるということなのではないのでしょうか。

原子力発電所に関していえば、私も、しかるべき国の機関などに問い合せをして、「大丈夫」「安全だ」「日本ではチェルノブイリと同様の事故が起こる確率は低い」と言われたことがあります。原子力発電所の初期の時代から携わってきた私でも、それをそのまま受け入れてしまう意識があります。検察官は間違いをしない立場にいるのだから間違いをしないと思つてしまふ。報道する側には、そういうところがあるのです。

それは、読む側にすればもっと強くなるでしょう。報道だから正しい。しっかりと調べて言っているのだから正しい。そう思っているでしょう。

いや、そうではない。自分たちが間違ってもいい。見る人によって見え方が違ってくる。...ということだが、この震災で改めて考えさせられたことでした。これは、ソーシャルメディアによって違

う見方を意識させられたということも、影響していると思います。大丈夫と言われていたことが、大丈夫ではなかった。とすれば、情報を発信する人間は、マスメディアも科学者も、これまでしか分からない、ここまでしか考えられない、ここまでしかできない、ということを正確に伝えることが大事なのではないか。こうなりそうだしということ自分の意見にするのではなく、私はこう思うということを出してもよいのではないかと感じています。

「間違っていました」とおっしゃった研究者もおりました。本当の自分の意見を言うことから変わっていくのではないのでしょうか。

もっと深い 科学の認識の 問題へ、 生き方の問題へ、 そしてメディアの 問題へ

正村 科学も放送局も、その活動を規制してきた理念は「客観主義」でした。科学は、客観的認識を目指し、放送局も客観報道を心がけてきました。しかし、その基準だけではうまくいかなつてきたというのが現状です。専門家と素人の垣根が崩れるなかで専門家の役割はどうあるべきか。また事実認識と価値判断を切り離せなくなってきたなかで科学者や放送局の役割はどうあるべきか、これが問われています。

ネット媒体が登場してくるまでは、マス



■宮城県のテレビ放送局がまとめた
震災関連出版物

T B C 『東日本大震災の記録～3・11宮城～』
(DVD / 2011年11月)

O X 『被災地から伝えたい テレビカメラが見た
東日本大震災』(DVD/2012年4月)

K H B 『3・11 東日本大震災 激震と大津波の記録』
(DVD / 2011年10月)
『心に残るあの頃の風景～みやぎの海岸線物語～』
(DVD / 2012年3月)
『3・11を語り継ぐ～民話の語り手たちの大震災～』
(DVD / 2012年5月)



メディアが唯一のメディアであったので、客観性や中立性が要求されてきました。しかし、多様なメディアが登場した今、マスメディアは、中立性を従来のような意味で貫く必要はなく、ある程度の自由度をもてるようになったのではないのでしょうか。

氏家 私は、マスメディアの古い教えを受けた年代です。自分がどう考えるかなどは誰も求めていない、事実を伝えることに徹することが大切だと教えられてきました。また一方では、中立性とは矛盾しますが、ニュースというものは成り行きが注目されるわけで、真実はどうかなどは関係ない、とも言われてきました。

しかし今は、ニュースの中で、放送局の姿勢として、いろいろなことをきちんと言うべきだという視聴者の意見も聞かれる時代になっています。マスメディアが意見を言

うということは、決して影響が小さくないものですから、その兼ね合いが難しいところですが、そういうことが求められているという気がします。

正村 おっしゃるように、客観性や中立性に関しては、ある種のバランス感覚をもつことが大切です。自由度が高まったとはいえ、放送局は、ネット上の送り手と同じでないことは確かです。大きな影響力をもっている以上、それなりの責任を伴います。多様な情報の送り手の一つとして、しかし大きな影響力をもった情報の送り手として、ソーシャルメディアとある種の緊張関係を維持していくことが必要だと思います。

氏家 実は、T B C が報道しているものに関しても、一言一句をチェックしているわけではありません。ある程度、取材者担当デスクが自由度を持って放送しています。ではどこでネット情報などと異なる基準を設け、棲み分けていくか。我々が持っているのと同等の情報量を持っているソーシャルメディアと競合しながら、我々が出す情報が必要とされるようにしていくためにはどうすればよいか。緊張感があります。

たとえば、この震災に関しては、2011



年11月に被災の状況をまとめたDVD『東日本大震災の記録～3・11宮城～』(143分)を発売しました。一般視聴者から提供いただいた映像もかなり使い、これまでになかったものになりました。自分たちだけでは取材の手が及ばなかったところの情報まで集めて、何を伝えられるのか。そうまでして、なぜ伝えなければならぬのか。悩み、ジレンマは、これまで以上に深まりました。震災でつきつけられたことだと思っています。

正村 価値観が多様化する中で、何が中立的かは判断の難しいところですね。

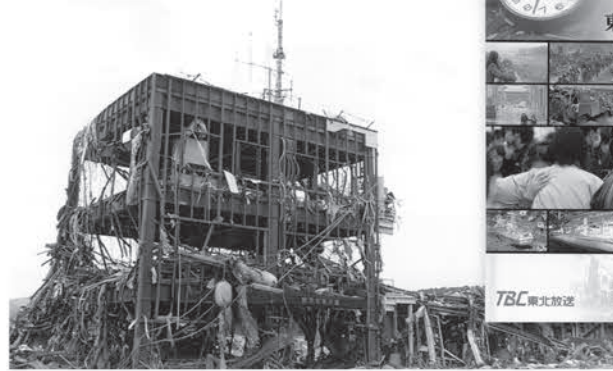
氏家 今、福島県大飯にある関西電力の原子力発電所の再稼働が大きな問題になっています。福島原子力発電所の事故も終息していない中で動かすという現実と直面して、マスメディアとしてはどうすればよいか。その判断の基準、その是非は、どのように考えればよいか。まっ、国が出した方針だからいいや」という程度の話ではない、高度なレベルでの判断を迫られているものだと思います。

簡単には答えを出せないことが、次々起こっています。それでいいのかと問うこと

はできますが、どうすればいいののかの答えが出せません。個人でも、メディアに携わるものとしても、ものすごく悩み、苦しんでいます。何をどうすべきなのか、考えさせられることが増えてきたという感じです。

正村 今回の原発事故では、自明に思ってきたことが根底から覆されました。リスク管理の在り方も見直さなければなりません。今回の原発事故は、想定が甘く、事故を起こさないための安全対策が不十分であったわけですが、問題はそれにとどまりません。チェルノブイリ原発事故のあと、日本でも過酷事故が発生する可能性を検討する機会があったにもかかわらず、それがなされませんでした。過酷事故対策をとるということとは、過酷事故が起こる可能性を認めたことになるからです。原発の安全性を強調して原発政策を押し進めてきた政府や電力会社の方針と矛盾すると判断されたからです。ここに日本的なリスク管理の問題点が現れているように思います。

日米のリスク管理を比較すると、どちらも事故を未然に防ぐための安全対策が取られるという点では共通しています。違いはその先にあります。米国では、過酷事故が起こることを想定して過酷事故対策がとられたのに対して、日本ではそうなりません。この違いの根底には、リスクの捉え方の違いがあります。欧米と違って日本では、リスクはゼロになりうると考えられています。日本の発想に立つと、万全な安全対策をとれば、過酷事故対策をとる必要がなくなります。こうして、リスクをゼロにできるという日本的な発想のほうに、



リスクはゼロにならないという欧米的な発想よりも、より大きなリスクを残してしまおうという皮肉な結果が生じてしまいます。

このような日本的なリスク管理は、過去にも多くの例を見ることが出来ます。たとえば、第二次世界大戦において日本軍は「必勝の信念」で戦ったので、個々の戦闘のなかで負けるかもしれないという想定は許されず、そのような状況が生まれた時には、ただ諦めるしかありませんでした。もちろん、日本にも欧米的な発想がないわけではありませんが、たとえば、避難訓練は、緊急事態が起った後の対応策を前もって考えるとい

う点では過酷事故対策に似ています。しかし、避難訓練にも日米の差が見られます。避難訓練が計画通りにいけば、日本では問題なしとされますが、アメリカではそのような避難訓練が問題とされます。というのは、避難訓練の目的は、想定外の問題点を見つけることにあるからです。

今回、「想定外」という言葉が言い訳に使われましたが、想定外を想定する発想が必要で、努力すれば、リスクはゼロにできる。このように安全神話から脱却し、リスクはゼロにはできないという前提に立つたうえでリスクをゼロに近づけていく努力をしなければならぬように思います。

氏家 確かに私も、リスクは管理できないからリスクなんだと誰かが言っていたことをおぼえています。アメリカでは、竜巻は起こることを防ぐことはできないものだと認識して対処法を考えているから、対応の仕方が早い。それに対して日本では、堤防をつくれれば、津波はそこで止まってくれる、津波がきても逃げなくていいという間違った考えがあった。それではダメだ。備えていても備えられないこともあると考えようというのが、この震災で改めて迫られたのだと思います。取材をしていて、なぜこんな海に近いところに学校があるの、と思ってしまう場所もありました。何もなければ風光明媚なところですが、一旦何かあった場合どうやって逃げるのか、考えたことはあるのか、と感じました。

同じように、原子力発電所もある程度のリスクはある、リスクはゼロではないと認

識して動かすのか、動かさないのか。議論していくきっかけにすべきなのではないかと思っています。

正村 過酷事故対策をとっていたら、今回の事故の被害をもっと軽減できたかもしれない。ただ、原発一般に関していえば、想定外を想定しても対処できない可能性がります。日本のような地震多発国で原子力をうまく制御できるのか、もう一度原点に立ち返って検討する必要があるように思います。個人的には、できるだけ早く脱原発へと舵を切るべきだと考えています。というのは、原発リスクは、社会全体をダウンさせてしまうシステム・リスクの一つですが、システム・リスクの原因を調べてみると、システム周辺の末梢的な部分から危機が発生するケースが少なくないからです。起こるはずもないような出来事から、不具合が連鎖的に広がっていく、最終的にはシステム全体をダウンさせてしまいます。原発に限らず、私たちの生活は高度にシステム化されているので、リスク管理は、そうしたシステム・リスクの問題として考えなければなりません。

氏家 それは、非常によくわかります。TBCでも、災害事故などが起こっても必ず外部と連絡がとれる回線を確保していたつもりでした。しかし今回の震災では、その回



線もダメになりました。自家発電もあるのに停電しても大丈夫と思っていたのですが、電気設備が震災で損傷し、オーバーロードになって1つずつ回線がなくなっていく、自家発電でもカバールシきれなくなり、器材を動かしている全てのものが動かなくなりました。

そのとき、窮地を救ったのはアナログな存在である「人力」でした。社員全員が本社マイクの前に立ってしゃべったり、連絡をいただいた情報をオンエアして放送を成立させました。それは、まさに想定外のことでした。大丈夫だと思っていたものが死んでしまふ、なくなってしまうということがあふ。リスクは思いもよらないところから出てくる。ネット社会では、ここで起こったことで、あつちが風邪をひくということが頻繁に起きてくるのではないかと。そして、起こったことは、そこだけではすまないように広がっていくのではないかと。脆弱な社会になってきているというのが、実感でした。

正村 それは同感です。情報に関していえば、情報処理の在り方は、これまでの分散化とは逆に、集中化の方向に向かっていきます。これまではパソコンの普及に伴って情報処理の分散化が進みましたが、今ではクラウド化のように、ネットワーク上に情報を保管することができるようになりました。しかし、ネットワークがダウンすれば、被害は非常に深刻なものになります。その意味では、ネットワーク化は両刃の剣になります。全部をデジタル化、集中化するのではなく、TBCでいえば、ラジオのような古いメディアも残してほしいですね。

氏家 私たちは、ローカルで何ができるの



かということを変更して考えさせられました。ラジオの安否情報はもちろん、何が発信できて何が残せるか。全体像を伝えたい、何が起こったのか、どんなことが起こっているのかを正確に伝えたいと思い、そこに生きて生活している人に何を伝えなければならぬのかを考えました。

原子力発電所の事故関係では、放射性物質が飛散したという情報を受けて、取材をどう考えればいいのか、現場に近い宮城県南部地域の取材はどうすればいいのか、などを改めて考えさせられました。

原子力関連の取材に関してはTBC独自の安全基準を持っています。取り決めもあります。女川で何かあった場合の想定はしていました。しかし、取材に出る人間全員に持たせるだけの線量計の準備はありません

んでした。

情報を求めている人がいる以上、何かしらを伝えるために取材に出ることが必要です。では、どんなことを注意しながら取材をしなければならぬか。ローカル放送は、こういうときに何ができるのかをあらためて考えさせられました。多賀城で津波から逃げる人の映像を撮影し「東日本大震災迫る津波に対応した記者の映像記録」として放送し、JNNグループ内での2011年年間大賞を受賞した記者は、まわりから聞こえていた声が忘れられないと言っています。また、石巻などで行われた仮埋葬の土葬の現場などを見れば、亡くなったというこの意味は何だろうとも考えざるを得ませんでした。深く考えれば考えるほど、客観的な事実というものが分からなくなり、一つ一つの事実をどう伝えればよいことなのかを考えさせるものになってくるのです。

被災3県の放送局の人が、みな同じようなことを考えたのではなかったでしょうか。また、応援にきた放送局の人も同じようなことを考えたに違いありません。

何年かすれば、これを基に、マスメディアも変わるのかもしれないね。

正村 そうした可能性は科学にもあるかもしれない。科学の世界は、非常に専門分化した世界です。少し前から文理融合が叫ばれています。文系と理系では研究スタイルが著しく違うために、文理融合はほとんど掛け声に終わっています。しかし、震災からの復旧・復興には、さまざまな分野の専門家の協力が必要です。震災をきっかけにして、理系の研究者と文系の研究者が対



話する機会が少しずつ増えてきているように思います。

氏家 TBCとしては、地震関係なら、たとえば東北大学工学研究科附属災害制御研究センター・今村文彦教授に、いろいろとお話を聞いています。しかし、そういった専門家に客観性を担保してもらおうというのは、なかなかできないことです。

研究者にも、いろいろな方向で研究している方がいるわけですから、誰か一人に傾斜することはできません。こう思う人もいれば、こう思う人もいます。紹介できないし、そうしなければ客観性・公平性が担保できないというジレンマがあります。

そのうえ、電波メディアでは、お一人に長い時間をかけて話を聞くということができません。ワンフリーズで、肝心なところ、興味のあるところを紹介することにとどまざるを得ないのです。

科学の問題、リスクの問題に関しては、テレビ放送というメディアそのものの限界をどうするかも考えていく必要があるのかもしれないね。

正村 震災後の課題の一つとして、震災を将来の世代にどのように伝えていくのかという課題があります。今回の震災では、おびただしい数の映像が残りました。今、震災の映像をアーカイブ化する動きが広がっ

ていますが、3・11以後のTBCの報道活動をまとめたDVD『東日本大震災の記録』3・11宮城(2011年11月11日発行)や、『2011・3・11 東日本大震災 東北放送の記録』(2012年3月31日発行)も、その貴重な記録となるでしょう。

氏家 少し補足させていただくと、震災関係の映像は、肖像権等の問題で使用できないものは除き、協力会社の映像などを加えて、30分のDVDで3000本になりました。3・11直後、仙台空港にあった放送局のヘリコプターは、NHKと共同通信が離陸した直後に津波を受けて使えなくなりました。TBCでも飛べなくなり、空からの映像は発生直後は全くありませんでした。陸上自衛隊もすぐに飛行を開始して映像を記録していましたが、その映像をすぐには借りることもできませんでした。

DVD『東日本大震災の記録』3・11宮城は、このような経緯で撮影した映像を編集したものです。完成品は、仙台市、宮城県、そして県内のすべての小・中学校に配布しました。

私たちは、この中に、「逃げることを考えていたんだ」という強いメッセージを込めています。津波が来たらとにかく逃げる。それが3・11から得た大事な教訓の一つだと思います。

正村 今回の震災によってさまざまな問題が浮かび上がってきましたが、これらの問題に向き合い、解決への努力を払うことが求められているように思います。

本日は、長時間ありがとうございました。

あゆみブックス仙台店との対話

— 3.11東日本大震災を経て、書籍への関心も変わってきたか!?



店内に入るとすぐに目に入るのが東日本大震災関連図書コーナーです。

あゆみBOOKS仙台店は、仙台市中心部の広瀬通と二番丁通の交差点にあり、ビジネス街の若い世代を意識してファッションやデザイン関係、歴史書のコーナーなどを充実させている書店です(平日は25時、土曜・日曜・祝日は24時までのオープンとなっています)。

2010年12月に東京から赴任し、仙台に十分に馴染める間もなく、2011年3月11日の大震災を経験したという二階堂健二店長に聞きました。

子供雑誌、参考書などが人気になった3・11直後

店長は、ビルの1階の堅固さに感心したのでそうですが(取材者としては、さすがに書店は書籍のプロ、書棚が崩れるような造りにしてはいけないことに感心させられました)、3月11日の地震でも、壁に据え付けられた書棚が倒れることはなく、平積みになっていた若干の本が崩れた程度だったといえます。停電もこの界限では一両日で回復したため、あゆみBOOKSが閉鎖していたのは4日間だけだったそうです。

開店直後の3、4日間は来店客がいない状態でしたが、近くのダイエーが食料品等の販売を始め、何百メートルにもわたって列ができるようになると同時に、書店への客の流れも生まれました。もちろん、物流がストップしていたため新刊の入荷はありません。店にあった在庫と、同じあゆみBOOKSの店でオープンできなかった一番町店の在庫も運び込んだので開店です。そして、児童書、少年ジャンプやコロコロコミックなどの子供向け雑誌、女性誌、参考書などがたいへん人気になりました。

たぶん、テレビの内容が震災中心で、子どもには刺激が強かったということもあり、

その時間を雑誌などに向けたことが大きな理由だったのではないかと。そう店長は分析しています。



あゆみBOOKSでは書棚や書籍コーナーを綺麗にするグッズ類も目立ちます。

東日本大震災関連図書の動向

震災関係図書で最初に書棚に並んだのは、4月9日に発行された河北新報社の『巨大津波が襲った3・11大震災』でした。すごい勢いで売れました。

この間、3月末には宅配便が通じ、4月7日の余震の翌日から取次とも結ばれるようになりまし。真つ先に取り寄せたのが吉村昭『三陸海岸大津波』(2004年/文春文庫)や広瀬隆『原子炉時限爆弾―大地震におびえる日本列島』(2010年/ダイヤモンド社)など、いわば「警告書」的な内容の書籍でした。

以後、1年余の間に講読された震災関係図書は、左のリストのように一般書の売上トップ50の上位に並んでいます。仙台市や

宮城県の地図も、被災地を確認したり、応援やボランティアで各地を訪ねるための資料として購読されたと考えられます。

また、『三陸海岸大津波』は文庫部門の売上ナンバーワンとなっています。東北地方の太平洋沿岸には津波の襲来を示す石碑などが残っていることを記し、大津波に備え

るべきことを警告していた、山下文男著『哀史三陸津大津波』『津波でんでんこ』『隠された大震災』『飯沼勇義著『仙台平野の津波』巨大津波が仙台平野を襲う』なども改めて出版され、写真集ほどではないものの少なからず購読されました。



■2011.3.11～2012.5の書籍売上50点

(震災関係図書と地図は太字)

- 1 巨大津波が襲った 3.11大震災(河北新報社)
- 2 東日本大震災復興支援地図(昭文社)
- 3 東日本大震災(朝日新聞社)
- 4 東日本大震災2011.3.11(河北新報社)
- 5 大人の流儀(講談社)
- 6 謎解きはディナーのあとで(小学館)
- 7 東日本大震災全記録(河北新報社)
- 8 3.11東日本大震災(河北新報社)
- 9 心を整える。(幻冬舎)
- 10 河北新報のいちばん長い日(河北新報社)
- 11 人生がときめく片づけの魔法(サンマーク出版)
- 12 榎木式カーヴィーダンスで即やせる(学習研究社)
- 13 榎木式カーヴィーダンスで部分やせ(学習研究社)
- 14 寝るだけ! 骨盤ダイエット(学習研究社)
- 15 仙台ぐらし(荒蝦夷)
- 16 The Great East(河北新報社)
- 17 みやぎの海辺思い出の風景(河北新報社)
- 18 復興に命をかける(PHP研究所)
- 19 みやぎの思い出写真集(宮城県)
- 20 もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら(ダイヤモンド)
- 21 闘う日本(日本工業新聞社)
- 22 日本中枢の崩壊(講談社)
- 23 仙台市(昭文社)
- 24 宮城県道路地図(昭文社)
- 25 9割がバイトでも最高のスタッフに育つディズニーの教え方(中経出版)
- 26 体脂肪計タニタの社員食堂(大和書房)
- 27 体のツボの大地図帖(マガジンハウス)
- 28 仙台宮城県便利地図(昭文社)
- 29 仙台学11 東日本大震災(荒蝦夷)
- 30 後悔しない生き方(ディスカヴァー・トゥエンティワン)
- 31 「次」にひかえるM9超(教育社)
- 32 平成の三陸大津波(メディア・パル)
- 33 好評の「忙しい人のための作り置き」レシピ(オレンジページ)
- 34 頭がよくなる思考術(ディスカヴァー・トゥエンティワン)
- 35 大人の流儀 続(講談社)
- 36 SWITCH29-5(スイッチ・パブリッシング)
- 37 マネジメント(ダイヤモンド)
- 38 ジェノサイド(角川書店)
- 39 舟を編む(光文社)
- 40 東日本大震災(読売新聞社)
- 41 体脂肪計タニタの社員食堂 続(大和書房)
- 42 0歳からの教育2012(阪急コミュニケーションズ)
- 43 仙台Walker(角川書店)
- 44 仙台市詳細図(昭文社)
- 45 勝つ履歴書(T・M・W第二)
- 46 謎解きはディナーのあとで2(小学館)
- 47 未来ちゃん(ナナロク社)
- 48 おとなのマナー完璧講座(日経BP)
- 49 仙台宮城県都市図(昭文社)
- 50 数学パズル論理パラドックス(教育者)

■過去の津波について記した地元の著作

山下文男◆哀史三陸津大津波(1990年/青磁社)

◆津波でんでんこ(2008年/新日本出版社)

◆隠された大震災(2009年/東北大学出版会)

飯沼勇義◆仙台平野の歴史津波 巨大津波が仙台平野を襲う(1995年/宝文堂)



『銃・病原菌・鉄』、『世界史』などへの傾斜

震災に直接関連した書籍とは少し異なる本について、店長には、この間の購読傾向で特に気づいたことがありました。それは、ジャレド・ダイアモンド『銃・病原菌・鉄(上・下)』(2012年に文庫化/草思社文庫)や、ウィリアム・H・マクニール『世界史(上・下)』(2012年に増刷/中公文庫)など、歴史や社会の仕組みについて書かれた書籍の静かな人気です。

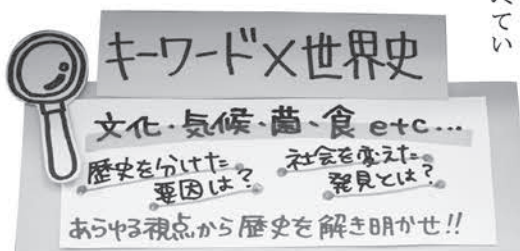
ここには、人間の手ではどうにもならない病原菌や自然の事象、科学技術などの変化が人間に、社会にいかにか大きな影響をもたらしたかといった内容が記されています。それこそが、震災を経て、大勢の人の精神を深く動かしたことなのではないか、と店長は感じたのです。そして、あゆみBOOK

そして、『ぼくはお金を使わずに生きることにした』『小商いのすすめ』などへ

店長は、現在、マーク・ボイル『ぼくはお金を使わずに生きることにした』(2011年11月/紀伊國屋書店、平川克美『小商いのすすめ』(2012年2月/ミシマ社)などにも関心の力を向けています。

経済成長というどこか不自然な活動を重んずることからの転換として、無理をしない生き方、自然な生き方、人と人との助け合いなどが今進んで考えられようとしている。そのような大きな流れが、これらの本とつながるのではないか、というのです。

Sでは、「キーワード×世界史」のコーナーを新たに設け、そこに多彩な歴史書を並べています。



本をつくること、本を読むことのポテンシャルという問題

ところで、入口すぐには、「ステイプ・ジョブズ愛読書」のコーナーが設けられ、オイゲン・ヘリゲルの『弓と禪』（2012年改版／稲村出版）と『日本の弓術』（2010年増刷／岩波文庫）がそこに置かれていること

が目を惹きます。

ヘリゲルは、1924―1929年の間、東北大学法文学部で哲学を教えていたドイツの哲学者であり、その当時に修業した弓術や禪についてまとめたのがこの二書です。これまで購読されてはいたのですが、ステイプ・ジョブズが愛読していたことをアピールしたところ、さらに売れゆきが伸びているそうです。

また、文庫のコーナーでは、「東北大学出身！理系女子が作者 仙台舞台のSF」のPOPを立てた松崎有理（理学部卒）『あがり』（2011年／東京創元社創元叢書）が目につきます。が、全体にいま、読書習慣の低下、iPadや電子書籍の普及による活字離れがいられています。アルバイトの面接などで学生と話しをする中で、いまの学生が本を読まなくなっているのは確かだと店長は感じています。しかしそれは、電子書籍に押されてというわけではなさそうです。電子書籍も含めて本づくりのポテンシャルが落ち、本を読まずには成り立たないという社会のポテンシャルが落ちているた

東北大学の本づくりへの期待

左のリストは、あゆみBOOKSが、昨秋以降、店頭で販売している東北大学文学部・文学研究科出身者の著書です。貴重な本が少しでも広く読まれるようになることが望まれます。その実現は書店だけの課題ではなさそうです。



■文学部・文学研究科出身者の著書

青木生子氏（法文学部卒）

◆茅野雅子全歌集（2012.1共同編集／おうふう）

青木美智男氏（文学研究科修了）

◆三くだり半の世界とその周縁（2012.3共著／日本経済評論社）

浅田秀子氏（文学部卒）

◆漢検・漢字ファンのための同訓異字辞典（2012.4／東京堂出版）

飯倉晴武氏（文学研究科修了）

◆日本人のしきたり手帳＜2012＞（2011.11／青春出版社）

内館牧子（文学研究科修了）

◆十二単衣を着た悪魔（2012.5／幻冬舎）

内山淳一氏（文学研究科修了）

◆仙台藩の絵師たち（2011.9／大崎八幡宮）

大角修氏（文学部卒）

◆看取りの後に葬儀・墓・供養（2012.4／双葉社）

佐藤賢一氏（文学研究科修了）

◆戦争の足音―小説フランス革命9（2012.5／集英社文庫）

佐藤憲一氏（文学部卒）

◆素顔の伊達政宗（2012.2／洋泉社）

中村彰彦氏（文学部卒）

◆海将伝（2011.11／文藝春秋）

早尾貴紀氏（文学部卒・経済学研究科修了）

◆シオニズムの解剖（2011.10共著／人文書院）

星亮一氏（文学部卒）

◆幕臣たちの誤算（2011.11／青春出版社）

山折哲雄氏（文学部卒・文学研究科修了）

◆閻魔になってもかまわない（2012.5／新潮選書）

◆救いとは何か（2012.3共著／筑摩書房）

山形孝夫氏（文学部卒・文学研究科修了）

◆死者と生者のラスト・サパー（2012.4／河出書房新社）

山田史生氏（文学部卒・文学研究科修了）

◆絶望しそうになったら道元を読め！（2012.2／光文社新書）

矢部良明氏（文学部卒）

◆エピソードで綴る茶入物語（2011.12／宮帯出版社）

屋山太郎氏（文学部卒）

◆屋山太郎が読み解く橋下改革（2012.5／海竜社）

■名誉教授・名誉博士の著書

佐々木昭夫名誉教授

- ◆世界史＜上・下＞(2012.4増刷／中公文庫 共訳)
- ◆疫病と世界史＜上・下＞(2009.2再版／中公文庫)

田中英道名誉教授

- ◆日本美術全史(2012.4／講談社学術文庫)
- ◆「写楽」問題は終わっていない(2011.12／祥伝社新書)

吉原直樹名誉教授

- ◆バリ島に生きる古文書(2012.3共著／東信堂)

ドナルド・キーン東北大学名誉博士

- ◆百代の過客(2011.10／講談社学術文庫)
- ◆百代の過客＜続＞(2012.4／講談社学術文庫)

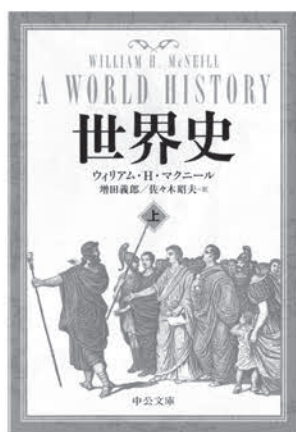
(前略)流行の度に人口の三分の一か四分の一が死んでしまうとき、最後に残ったのは一〇パーセントにも満たず、技術や伝統の継承は途切れ、何よりもそうした恐ろしい病氣にもスペイン人は一向に平気ということになれば、それはインディオへの神罰かと思えなかった。改宗は必然的である。このことを無視しては、インディオの遺跡など単な

あゆみBOOKSで、いま、「キーワード×世界史」のコーナーの本とともに静かなベストセラーになっているのが、ウィリアム・H・マクニール(1917-)。カナダの『世界史(上・下)』と『疫病と世界史(上・下)』です。この両書は、故・佐々木昭夫名誉教授(比較文学・比較文化)による訳書です。佐々木名誉教授は、『疫病と世界史(下)』の「文庫版訳者付記」で、

る脆弱な作り物に見えてしまふだろう。ナスカの地上絵を見ても、それを作った人々にはいかなる深遠な世界観が宿っていたかなどとても感じることは出来まい。過去の歴史を柔軟に、少しでも正しく判断する上で本書は大きな役割を果たす。

と記しています。

2011年秋から2012年春にかけては、田中英道名誉教授(日本美術史)、吉原直樹名誉教授(社会学)、ドナルド・キーン東北大学名誉博士(日本文学・日本文化)の著書(改版・増刷の本を含む)も店頭で目にするようになりました。



『世界史』『疫病と世界史』など文学研究科・名誉教授たちの新刊に注目

日本思想史研究者の共同編集・執筆になる『日本思想史講座』シリーズに注目

2012年4月、ベリかん社から、佐藤弘夫教授(日本思想史と、田尻祐一郎氏(文学部卒、文学研究科修了)が共同編集者として参加している『日本思想史講座』シリーズの第1巻『日本思想史講座(1)古代』が刊行されました。長岡龍作教授(日本・東洋美術史が「救済の場と造形」を、佐藤教授が「総論 古代の思想」「本地垂迹」を執筆しています。日本の思想史を新たに展望するシリーズとして、続刊も大いに期待されます。



2010年、2011年研究科修了生の著書にもスポット

2011〜12年には、社会人として活躍した後大学院文学研究科で日本史を専攻し、博士課程を修了した2人の研究者の著書が出版されるといってビックスもありました。一つは、2010年修了・橋本今祐氏の『明治国家の芸能政策と地域社会―近代芸能興行史の裾野から―』(2011年7月／日本経済評論社)であり、もう一つは、2011年修了・中島耕二氏の『近代日本の外交と宣教師』(2012年1月／吉川弘文館)です。橋本氏は1928年生まれで経済学を、中島氏は1948年生まれで法学を学び、長い勤務歴を経た後に東北大学大学院文学研究科に入学し、研究者の道を歩み、成果を著書にまとめるに至りました。東北大学で学ぶことで、このような可能性を開くこともできます。



東北大学文学部の

歴代研究者

メモリアル 7



実証的な文献批判にもとづく
中国思想史研究を確立した

武内義雄博士

写真は、東北大学史料館
「東北大学関係写真データベース」より

Takeuchi Yoshio

これは、2005年に一徳社から刊行された武内義雄訳註『論語』(岩波文庫復刻版)、巻第一「学而第一」冒頭の一節です。1933年に岩波文庫で発行された後、近年では絶版となっていました。1933年に岩波文庫で発行された後、近年では絶版となっていました。現在、入手できる武内博士の著作としては、このほか、2012年2月に増刷された、武内義雄・坂本良太郎共同訳註になる『孝経・曾子』があります。『孝経・曾子』は、支那学第一講座講師であった坂本良太郎(1942-1946年在籍)と共に訳註を行い、1940年に岩波書店から刊行され、その後長く品切れになっていたのですが、2012年に第6刷が刊行されました。他の著書の再刊も期待したいものです。

Profile

三重県出身。1886-1966年。大正・昭和時代の中国哲学者。1923年4月に東北帝国大学法文学部に任官し教授として支那学第一講座(現在の中国思想中国哲学専攻分野)を開設し、1923-46年の期間在籍。その間、大学附属図書館長、法文学部長も務める。中国古代思想史の研究に緻密な文献批判を導入し、儒教、老荘思想をはじめとする中国思想の研究に大きな足跡を残した。

一、子曰、學而時習之、不亦悦乎、有朋自遠方來、不亦樂乎、人不知而不慍、不亦君子乎、
二、有子曰、其爲人也孝悌而好犯上者、鮮矣、不好犯上而好作亂者、未之有也、君子務本、本立而道生、孝悌也者、其仁之本與、
三、子曰、巧言令色、鮮矣仁、
四、曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎、
五、子曰、導千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時、
一、子曰く、學びて時に習ふ、亦悦(よろこ)ばしからずや。有朋(とも)友朋、遠方より來る、亦樂(よろこ)しからずや。人(ひと)己(おのれ)を知らざるも慍(い)みず、亦君子ならずや。
二、有子曰く、その人と爲り、孝弟(こてい)にして上を犯すことを好むものは、鮮(すくな)なり。君子は本を務む、本立ちて道生る、孝弟はそれ仁の本か。
三、子曰く、言を巧し色を令する(人)は、鮮(すくな)し、仁あること。
四、曾子曰く、吾日に三たび吾が身を省る、人のために謀りて忠ならざるか、朋友と交りて信あらざるか、習はざるを傳ふるかと。
五、子曰く、千乘之國を導(ひ)くには、事を敬んで信あり、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てせよ。



武内義雄・坂本良太郎訳註『孝経・曾子』(岩波文庫)は、現在、入手し読むことのできる1冊です

東北大学附属図書館では『論語の研究』の初版を読むこともできます

論語の研究



論語に限らずすべての古典の研究には三つの態度がある。第一は言語学的に字句を解釈してその意を把握せんとするものでこれを訓詁学という。第二は読者の抱懐する思想に本づいて矛盾なく古典を説明せんとするもので宋・明の性理学者の態度がそれである。第三は書物の変遷を稽えその源流を探って原始的の意義を闡明せんとするものでこれを批判的態度とい

〔論語の研究〕結論より

中国思想の研究史の中で

明治以後、大学で中国語、中国思想、中国文学などの研究が学問として進められるようになるとともに、注釈、研究も精緻を極めるようになりました。武内義雄博士が師事した狩野直喜(1868-1947年)と、内藤湖南(1866-1934年)、桑原

先に紹介した『論語』は、1933年に刊行された時に驚きを持って迎えられた訳注です。我々がよく知っている訓みとも異なるのではないのでしょうか。

武内義雄博士は一字一句をなおざりにしない丹念な訳注を行うことを通して『論語』に対する自らの理解を鍛え、発展させ、それをまとめ、訳注を刊行した6年後の1939年に『論語の研究』を刊行しました。ここにも、緻密な文献批判、本文の注釈をもとに思想を考究する博士の学問のあり方が如実に現われています。

隣蔵(1871-1931年)が京都大学で支那学を創始し、以後、津田左右吉(1873-1961年)、吉川幸次郎(1904-1980年)等々へと広がり、深められて行きました。

その中で武内博士は、『論語』(1933年)に続き、『論語の研究』(1939年)、『儒教の精神』(1939年)などを発表したのです。『論語の研究』の「結論」において、博士は、自らの研究姿勢について左のように述べています。

武内博士より下の世代の吉川幸次郎は、『論語』(1959年)において、より詳しい研究は、近ごろ武内義雄博士の『論語の研究』(昭和十四年岩波)などによつて行われつつあり、さいこの整理と定着は、漢代になってからとするのが、近ごろおおむねの学者の意見であるVという評価を記しています。東北帝国大学文学部で武内博士に学び、戦後、その跡を継いだ金谷治(1948-83年)講師、助教授、教授在

中国思想研究に文献批判を導入した武内義雄博士

籍は、『論語』(1962年)で、武内義雄博士の『論語の研究』、津田左右吉博士の『論語と孔子の思想』の両書は、この問題(編集部注)『論語の編纂問題』を追求して精密を極めている。(ちなみに、両書は現代での論語研究の白眉である。)Vと評しています。

1923年5月、東北帝国大学文学部に着任し、支那学第一講座を開いた武内義雄博士。その関心は、中国哲学研究の学問的方法を確立しつつ、戦国時代の諸子百家の興隆を背景に展開した儒家思想・道家思想の演変を究明すること、漢代以降の儒教・道教・仏教の交渉の歴史を跡づけること、そして日本での儒学の受容や解釈の歴史を跡づけること

にあつたといわれます。

その研究方法は、京都帝国大学で狩野直喜(中国文学・中国哲学)、内藤湖南(東洋史学)の下で培った「清朝考証学」「江戸考証学」「思想史学」を折衷して確立した「文献学的思想史学」とでも称すべきものです。(2003年「東北大学文学部・文学研究科の歩み」より)

研究成果のほとんどは、1978-79年、角川書店発行の『武内義雄全集』全10巻に収められています。この第九巻に収録された「支那学研究法」で、博士は、次ページのように記しています。

その上で、中国思想研究の基礎に当たる文献研究に関しては、A鑑別(資料の真偽、瑕瑜を分かち)、B輯佚(他書の引用などを拾い集めて散佚した書物を顧みる)V、C校讐(異本を対校して客観的証佐から誤りを訂す)V、D稽疑(異

■武内義雄博士の主な編著作

老子原始	1926	弘文堂書房
老子的研究	1927	改造社
輕雲外山翁伝	1928	大阪商業興信所
老子と莊子	1930	岩波書店
支那文字學	1931	岩波書店
東洋哲学史上・下	1932	岩波書店
論語(訳注)	1933	岩波書店
支那思想と佛教との交渉	1935	岩波書店
諸子概説	1935	弘文堂書房
支那思想史	1936	岩波書店
朱子・陽明	1936	岩波書店
孟子(共訳)	1936	岩波書店
老子(訳注)	1938	岩波書店
儒教の精神	1939	岩波書店
論語の研究	1939	岩波書店
孝経・曾子(共訳)	1940	岩波書店
老子	1940	岩波書店
易と中庸の研究	1943	岩波書店
支那学研究法	1949	岩波書店
論語	1963	筑摩書房
論語(岩波文庫復刻版)	2005	一穂社
孝経・曾子	2012	岩波書店



全集には、渡欧時の写真、自宅書斎での写真なども収録されています

本がない場合、前後の文脈や句法を稽（かんが）えて疑わしきを決する）▽、△訓詁（文字の形・音・義の学問に通曉する）▽、△整理（文献の地位をたしかめる）▽を徹底することを詳説しています。

『武内義雄全集』という成果

この全集には、1936年10月に発表された『論語の研究』が第一巻「論語篇」冒頭に収められ、以下、「儒教篇一・二・三」「老子」「諸子篇一・二」「思想史篇一・二」「雑著篇」と続き、儒教の研究、曾子、孟子、老子、莊子、孫子の研究、支那（中国）思想の研究等々が収められました。各巻とも、中国思想中国哲学専攻・金谷治教授（前掲）が解題を行っています。

なお各巻には月報が折り込まれており、武内義雄博士の業績を

概観する上での貴重な資料となつています。たとえば7回にわたって、京都大学関係者・吉川幸次郎（前掲／中国文学）、貝塚茂樹（1904-1987年／東洋学・中国文学）と、東北大学関係者・小川環樹（1938-1950年／中国語学・中国文学専攻講師／助教教授（教授在籍）、金谷治、金子息・武内義雄（1913-2002年／宗教学）による「座談」武内義雄博士の思い出が連載され、月報1では、吉川が

武内先生は、専門家の間では、フィロソフィーとしてよりもむしろフィロロジックとして有名だったんです。そのために、先生と合わない人もいました。しかしわたしは、ここが先生のお偉いところだと思ふんですが、武内先生こそ、フィロロジックであることによってフィロゾーフだった方だ

支那の文献は昔から經史子集の四部に大別されて經と子とは哲学思想に関する文献、集は文学的作品、そして史は歴史地理に関する記録だと考えられているが、これら分類はもともと書籍の編纂様式に本づくもので、かならずしもその内容によるものではない。そこで經部の文献中にも詩のごとき文学的作品もあれば、尚書・春秋のごとき歴史的記録もある。また集部の中にも学者思想家の文章には思想に関するもの、史料にあたるものも少なくはなく、反対に史部の書籍中にも子部や經部の引用文も多い。従って支那の研究に従事するものは、いかなる分野の学問をしてもあまねく經史子集の全体を渉獵（しやうりやく）しなければならず、すべて同一資料を取扱（しうさく）うことになるから、その取扱方法に共通するところのあるのは当然である。そこで私は文献の取扱方法を中心に、貧しい経験に本づいて支那学研究法をのべて見たいと思う。

（『武内義雄全集』第九巻「支那学研究法」より）

■武内義雄全集＜全10巻＞の目次から

- 第一巻「論語篇」●論語の研究、論語義疏（校本）・校勘記、（その他）校論語義疏雜識、論語皇疏校訂の一資料、漢石經論語殘字攷
- 第二巻「儒教篇一」●儒教の倫理、孝經の研究、論語、孝經・曾子、（その他）正平版論語源流攷、曾子考、孟子、孟子と春秋
- 第三巻「儒教篇二」●易と中庸の研究、礼記の研究、学記・大学、（その他）読易私言、隸古定尚書に就いて、九条公爵家本隸古定尚書に就いて、古文尚書の二鈔本、儒学史資料として見たる兩載記、礼の倫理思想、曲礼攷、礼運考
- 第四巻「儒教篇三」●儒教の精神、朱子・陽明、（その他）宋学の由来及びその特殊性、經学の起源、經典釈文をよみて、經典釈文周易叙録の考察、読家語雜識、支那哲学の人間觀、東洋学の使命、群書治要と清原教隆、国宝史記孝文本紀解題、日本の儒教、日本に於ける論語の学
- 第五巻「老子篇」●老子原始、老子的研究、（その他）老子攷、唐広明元年老莊道德經に就いて、河上公老子唐本攷、老莊思想
- 第六巻「諸子篇一」●老子と莊子、老子、（その他）日本における老莊思想、莊子攷、読莊私言、列子冤詞、管子の心術と内業、鬼谷子を読む、六国年表訂誤、桓譚新論に就いて、曾文正公家訓
- 第七巻「諸子篇二」●諸子概説、孫子の研究、（その他）孫子十三篇の作者、孫子考文、楷書の変遷、書法十二意、学書三昧、山陰の徑、古写經の話
- 第八巻「思想史篇一」●中国思想史、三教交渉史、中国經学史、
- 第九巻「思想史篇二」●支那学研究法、中国思想史ノート、（その他）南北學術の異同に就きて、支那思想史上より見たる釈道安、魏書釈老志を読み、教行信証所引弁正論に就いて
- 第十巻「雜著篇」●燕京讀書記—清朝學術史—、江南汲古、訪古碑記、西塾偶談、（その他）鉛石堆讀書記、聲牙翁必須書目、四部叢刊、桐城派の圖識法、王引之、唐鈔本韻書と印本切韻との断片、仁斎先生の經学、富永仲基に就いて、懷德堂と大阪の儒学、聖武天皇宸翰雜集隋大業主浄土詩と往生礼讃、本邦儒学史より見たる青柳文庫、西来寺訪書記、米沢訪書記、湖南先生の追憶、故会員狩野直喜君略歴、碩園先生の遺訓、露伴先生と道教、本田兄の想い出、学究生活の思い出、司馬溫公を慕う、LE TCHONG YONG（中庸）

と思つております。「經典釈文」の講演を聞いたときそう思いました。講演のはじめのほうでは、「この字は、この写本ではこの字になっている」という風な話をしてらしたけど、最後は、ばあつととんで、「これは、当時の思想からいつてこうなるのだ」という結論にもつていかれ、わたしはあつと驚きました。（中略）これはやっぱり、

先生の方法が、フィロロジから出発して、フィロソフィーだったことを示すと思います。

全集は、確固としたフィロソフィー（哲学）を持った上で、フィロロジ（文献学）を徹底した武内博士の研究の特徴や構造を体系的に知ることができるものとなっていると言えるでしょう。



仙台文学館「みやぎの杜の文学者たち」図録中の文人サロンのページ

■「岩波講座 世界思潮」の中の武内博士と東北大学研究者

第1輯(世界思潮篇)

阿部次郎「世界思潮」、大類伸(西洋史研究室・1924-44年在籍)「西洋思潮」、石原謙(西洋哲学史第一講座・1924-40年在籍)「基督教思潮」

第2輯(東洋思潮篇)

宇井伯壽(印度学講座・1923-30年在籍)「印度思潮」、村岡典嗣(文化史学第一講座・1923-46年在籍)「日本思潮」、武内義雄「儒教思潮」、青木正児(支那学第二講座・1923-38年在籍)「支那文藝思潮」、岡崎義恵(国文学講座・1923-55年在籍)「日本文藝思潮」

第3輯(現代思潮篇)

高橋稔(倫理学専攻分野・1927-47年在籍)「現代道德思潮」、児島喜久雄(美学講座・1923-37年在籍)「現代美術思潮」

第4輯(人物篇)

宇井伯壽「佛陀」「龍樹」「世親」、武内義雄「老子」「孟子」「莊子」、河野與一(フランス文学講座・1927-43年在籍)「プラトーン」「アウグスティヌス」、阿部次郎「ダンテ」、児島喜久雄「レオナルド・ダ・ヴィンチ」

第5輯(人物篇)

土居光知(西洋文学第一講座・1924-48年在籍)「シェイクスピア」、石原純「ガリレオ・ガリレイ」「ケプレル」、河野與一「デカルト」、小宮豊隆(西洋文学第二講座・1924-46年在籍)「芭蕉」、村岡典嗣「賀茂真淵」「本居宣長」、阿部次郎「ゲーテ」、石原謙「シュライエルマッヘル」

第6輯(宗教篇)

石原謙「獨逸神秘主義」、児島喜久雄「近代美術史に於ける「レネサンス」の概念」

「岩波講座 世界思潮」に見る 武内義雄と東北帝国大学 法文学部

1928-29年、岩波書店から、世界と日本の思潮を概観する『岩波講座 世界思潮』が出版されました。帝国大学を中心とする主力研究者が執筆しており、当時の日本の思想状況を知る上で貴重な資料となっています。

この第1輯巻頭で、法文学部の阿部次郎教授(美学講座・1923-45年在籍)が次のような、講座全体の跋ともなる一文を記し

ています。

今私の前に置かれてゐる課題は「世界思潮」である。私は本講座の體系の中にあつて、私の課題を如何に解くべきであらうか。其處には「西洋思潮」と「東洋思潮」がそれぞれ獨立に取扱はれてゐるだけではない。此等の兩思潮が更に細分されて、老樹の年の輪のやうに重なり合つて反復分説されてゐるのに、私は更に此等の全體を包括する大きな(従つて必然的により大まかな)輪を描いて、實質的に世界思潮の動き

を叙述すべきであらうか。

そして、上記のとおり東北帝国大学法文学部の代表的研究者が名を列ね(石原純は理科系で、当時は東北大学を退官)、武内博士も、儒教、老子、孟子、莊子と、中国古代思潮の重要な項目について執筆し、氣を吐いています。中国思想に関しては、他に津田左右吉・支那思潮、境野黄洋・支那佛教思潮、青木正児・支那文藝思潮、松井等・支那社会思潮(以上、第2輯)、藤原正・孔子、幸田露伴・墨子、本田成久・荀子、三宅雪嶺・王陽明

(以上、第4輯)が収められていますが、武内博士が最多項目を執筆しています。この分野での武内博士のポジションがよくわかります。ちなみに、この時代、仙台では、ここに名を列ねている研究者たちを中心多彩な文人サロンが開かれ、武内博士も主要人物の一人となっていました。仙台文学館開館記念特別展として開かれた「みやぎの杜の文学者たち」(1999年5月)の図録に紹介されています。

いま、東北大学附属図書館で「武内文庫」整理中

武内義雄博士の蔵書は1万冊にものぼりますが、2011年、東北大学附属図書館が「武内文庫」として受け入れることが正式に決定しました。現在、萱場健之氏(一般財団法人斎藤報恩会嘱託)の指導の下、図書館職員を中心に、文学研究科の中国思想、中国文学、東洋史の各研究室の教員、大学院生、学生が協力し、その整理に当たっています。この膨大な文献からは、よりよい本文(テキスト)、よりよい訳注、解釈を求めて、少しでも多くの書籍を読もうとした武内博士の中国思想史研究に対する強い情熱と厳しい姿勢がうかがわれます。実証的な文献批判にもとづく中国思想史研究を確立した武内博士ならではの蔵書の偉観です。

2012年7月に開かれる東北大学オープンキャンパスでは、文学部の31日午前の公開講座において、中国思想史中国哲学専攻・三浦秀一教授が「東北大学図書館新着「武内文庫」と「孝経」と題する講演を行います。



武内博士の蔵書の一部
(三重県の実家にて)

イエイツ、シングからシェリダン父子へ アイルランド演劇の研究

アイルランド、ダブリン市、アビー座

2012年7月27日、ロンドンオリンピックが開幕します。ロンドンでは1908年、1948年に続く3回目ですが、1908年にはまだ日本はオリンピック参加国となっておらず（初出場は1912年のストックホルム大会から）、1948年は敗戦国として出場が認められず、日本代表がロンドンで競技するのは今回が初めてのことになります。日本からも大勢の人がロンドンへ、イギリスへと出かけることでしょう。

この機会を利用して、イギリス（イングランド）の西隣、アイリッシュ海を隔てたアイルランドにまで視線を向けてみましょう。日本では、『ガリヴァー旅行記』のジョナサン・スウィフト（1667-1745）、『ドリアンクレーの肖像』のオスカー・ワイルド（1854-1900）、『ビグマリオン』のバーナード・ショー（1856-1950）、『ケルトの薄明』のウィリアム・バトラー・イエイツ（1865-1939）、『ダブリン市民』や『ユリシーズ』のジェイムズ・ジョイス（1882-1941）などの文学者が思い出されるのではないのでしょうか。フランスに移住して『ゴドーを待ちながら』を書いたサミュエル・ベケット（1906-1989）なども、その一人です。イエイツ、ショー、ベケットは、1923年、25年、69年に、ノーベル文学賞を受賞しています。

このアイルランドという国。英語表記は'Ireland'ですが、アイルランド語表記では国名が'Eire'、標語が'Eire goodeo'（アイルラン

ドよ、永遠に）となっています。

紀元前265年頃からケルト人が渡来し、つくりあげた国であり、元来はケール語（ケルト語）を母語とし、9-12世紀にはケール語による文学が発達しました。

しかし12世紀後半にノルマン人の侵攻が始まり、1171年に英国王ヘンリーⅡの支配下に入り、1541年には英国王ヘンリーⅧがアイルランド王を自称すると共に英国からの入植者が増加。1652年にはクロムウェルが植民地化を実行し、1801年にイギリスによる併合となりました。

イギリスからの独立が進み始めるのは、20世紀に入ってからでした。1922年に南部26州が分離してアイルランド自由国を結成。1937年に新憲法を施行して国名をEireと改称して、イギリス連邦中の独立した一員となります。そして1949年にはイギリス連邦を脱退し、アイルランド共和国となったのです。

首都ダブリンまではロンドンから約1時



英文学専攻
岩田美喜 准教授

Miki Iwata

Profile

1973年、北海道出身。東北大学文学部英文学科卒業、文学研究科博士課程修了。2001年、博士（文学）取得。日本学術振興会特別研究員、東北大学講師を経て、2006年現職に。イギリス文学、アイルランド文学を専攻とし、18世紀演劇の非標準英語使用を通じた他者表象の研究、近代英語演劇におけるステージ・アイリッシュマンの表象の政治・文化的的研究などを研究課題としている。単著『ライオンとハムレット』（2002年）、編著『ポストコロニアル思想の諸相』（2008年）、共著『イギリス文化入門』（2010年）などがある。

間半のフライトで、バスポートチェックもなく入国できます。ダブリンは2010年にユネスコによって「文芸都市」に指定された、文学の薫り高い街であり、徒歩圏内にゲイ・エティ座、アビー座、ゲイト座といった歴史ある劇場がひしめいています。

岩田美喜准教授は、アイルランド英語文学のなかでも特に演劇に着目。長きにわたってイギリスの植民地であったという状況の中、アイルランド人劇作家たちが、いわば同化政策によって押しつけられたことばである英語を舞台のうえでどのように語り継いできたのかを研究してきました。



「変な発音」と指摘され

岩田准教授のアイerlandへの関心は、高校時代にさかのぼります。美術系大学への進学を目指していた高校生は、鶴岡真弓『ケルト／装飾的思考』(ちくま学芸文庫)と出会って、ふたつの点で興味を引かれます。ひとつはもちろんケルト美術に対する興味ですが、それに加え、幼時からカトリック教育を受けて育った岩田准教授には、キリスト教以前のヨーロッパ世界というものが新鮮に感じられ、これに対する憧れが喚起されたのです。

同じころ、角川文庫で松村みね子によるW・B・イエイツ『鷹の井戸』の翻訳が復刊されました(現在では再び絶版)。これは一般には詩人として知られるイエイツによる一幕劇集で、アイerlandの神話的英雄クーリンを主人公にした標題の戯曲のほか、日常の生活に満足しきれず鬱屈する若い妻が、妖精に誘われて神隠しに遭う「心のゆくところ」という小品が併録されています。

特に後者の戯曲は、美術系への進学をあきらめていわゆる普通の受験勉強をしていた受験生の心に、忘れがたい印象を残しました。この戯曲集との出会いのため、岩田准教授はしばらくイエイツのことを、詩人ではなく劇作家だと信じていたそうです。

その後、東北大学文学部英文学専修に進みますと、小説よりも詩や演劇を主に勉強し、語られることばとしての英語に対する関心を深めました。しかし、そこで自らの英語運用能力とのギャップに関する大きな悩みが生まれました。有り体に言うと、発音が下手だったのです。

当時英文学研究室に在籍していたピーター・ロビンソン先生(現レディング大学教授)は、著名な詩の研究者であるとともに自らも多くの詩集を出版している詩人でもあり、イギリス英語の音の響きをととても重視していました。大学院の演習では自分だけ何度も発音を直されるなど厳しい指導を受

け、すっかり自信を無くしてしまいました。

もちろん、英語学習者としてはそのように丁寧に発音指導をしてもらったのはありがたいことであり、感謝すべきことではあるけれど、他の大学院生たちの前で何度も同じ単語を直された羞恥の感覚が忘れられないと、岩田准教授は振り返ります。そして、その感覚が、高校生のころから漠然と抱いてきたアイerlandへの興味と重なって、「与えられた言語としての英語で語る演劇」という研究テーマが見えてきたのです。

17世紀以降に本格化したイギリスの植民地同化政策により、アイerlandの母語であるアイerland語は急速に駆逐されて行きました。18世紀に入ると、アイerland人の親たちは子どもが社会的に大きな不利を蒙らないようにと、むしろ積極的に英語を習わせるようになり、この傾向はケルト文芸復興運動が興る19世紀後半まで強まるばかりでした。しかし、こうしたケルト復興運動にあっても、アイerland語そのものが復活したわけではありません。たし

かに、ダグラス・ハイド(1860-1949)のように、アイerland語そのものの復興を目指し、アイerland語で執筆した学者や作家もいました。

しかし、『ケルトの薄明』(1893)などの出版で復興運動の旗手のように言われたイエイツは、アイerland語を喋ることはできませんでした。イエイツの同士であったJ・M・シンク(1871-1909)は、アイerland語を含む豊かな語学能力を有していましたが、「すでにアイerland人のことばは(アイerland化された)英語になっ

てしまっている」と考え、敢えて英語で執筆することを選びました。

歴史的な母語と機能上の母語に挟まれた人々が、舞台の上に乗せようとしたことは、どのようなものだったのか——こうした関心が、2000年11月に提出された博士論文『Years the Playwright: W. B. Yeats's Dramatic Achievement in Modern Irish Theatre』へとつながっていったのです。

不条理演劇のさきがけとしてのイエイツ演劇

この論文は、イエイツがシングやレイデ・イ・グレゴリー(1852-1932)といった仲間たちとともに乗り出した20世紀初頭のアイerland演劇運動を題材に、イエイツ演劇がその長いキャリアのなかでたどった軌跡を検証したものです。

イエイツは当初、文化的ナショナリズムの一環として、アイerland民族演劇の創

作に乗り出しました。アイerland文化が質的にイギリスのそれに劣るものではないことを示すことが、アイerlandの独立に資すると考えたのです。そして、口承文芸の伝統が残るアイerlandでもっとも人々の心に直接訴えかける媒体として、イエイツらが選んだのが演劇であり、さらには農民や漁民たちが操るアイerland訛りの英



がくま学芸文庫





スライゴーにあるイエイツ像



岩田研究室におけるイエイツの著作の蔵書コーナー

語による台詞だったのです。

しかし、ここでイエイツはジレンマに陥ります。「ハイバーノイングリッシュ」(Hiberno-English)と呼ばれるアイルランド化した英語を知悉しているシングやレイディ・グレゴリーと違い、彼はこうした言葉遣いを自在に操ることを難しく感じたのです。また、彼による象徴性の高い芝居は、当時必ずしも好意的に受け止められた訳でもありませんでした。大衆に理解されていないと感じたイエイツはやがて、日本の能のドラマツ

ルギーなどを取り入れた実験的な芝居を作るようになります。これら後期に執筆・上演された戯曲はサミュエル・ベケットらに影響を与え、いわば20世紀半ばに世界的な流行となった不条理演劇の先駆けとなったのです。

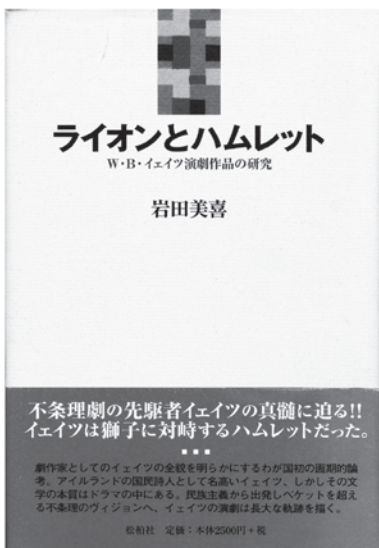
劇作家としてのイエイツの人生は、メディアや観客(や時には一座の仲間たち)との苦闘の連続でした。しかし、イエイツのこ

族文化の向上を目指す、ローカリティに根ざした演劇が、いつしか不条理演劇というグローバルな演劇運動の先触れとなったのです。

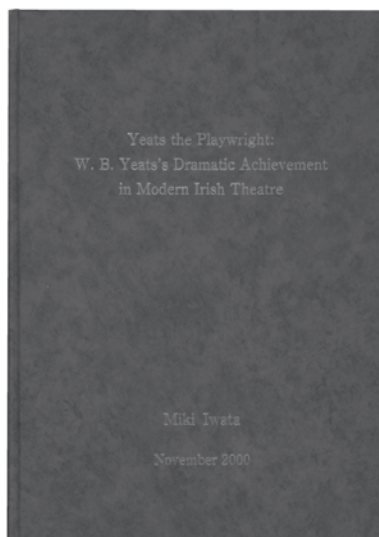
この博士論文のうちに、一部を加筆訂正の上自ら日本語に翻訳した『ライオンとハムレット―W.B.イエイツ演劇作品の研究』(松柏社、2002)として出版されました。

「ライオンとハムレット」というフレーズは、イエイツ自身の回想録からの引用です。イエイツは青年時代、政治的なクラブに出入りしては議論を戦わせるのを習慣としていましたが、それは本人によれば「ハムレットがそうしたように、私も敵対心を持った奴らと遊んでみたかった。いわばライオンの顔を睫毛一本動かさずに覗き込むようなことをしたかったのだ」と述べています。

『ライオンとハムレット』の「おわりに」では、このことが書名となったいきさつが説明されています。「ハムレットはイエイツが演劇について、もしくは広く文学について語るときに繰り返し取り上げられるキャラクターである。面白いことに、イエイツが語るハムレットは、ツルゲーネフの定義したいわゆるハムレット型の内向的な人物ではない。むしろより行動的な、冷静に困難と対峙する英雄という側面を強調して描かれることが多い。ハムレットという瞑想型の代表のような人物に外向性を見いだすイエイツの視点は、非常に興味深い。つまり、著者には、詩的・演劇的要素を統合しようとしたイエイツ自身の姿と、彼のハムレット像が重なって見えたのである」と。



博士論文に加筆訂正して翻訳刊行した著作



2000年11月に提出した博士論文

共同でつくる演劇にこそ社会の現実が現われる

では、なぜ演劇なのでしょう。

演劇は、黙読を前提として書かれた小説とは違って、語られることばを聞くという文芸ジャンルです。また、脚本家、演出家、役者、裏方などの共同作業によって成立する演劇では、一人一人が背負った社会的背景が大小にかかわらず現れ、作品に反映されてきます。たとえば、シングの代表作『西の国の伊達男』(1907)では、リハーサル中に女優のひとりがある台詞が「下品だ」と

して、口にするのを拒否したことが知られています。初演時には、アイルランド女性を冒瀆する内容が含まれていると激昂した観客による暴動が起こってしまいました。

テレビやビデオ、さらにはインターネット動画などを通じてドラマや映画を個室で楽しむような現代では少し想像しにくいこともかもしれません。しかし20世紀初頭までは、観客に直接語りかける演劇というジャンルが社会に与える影響力は、実に大きな

ものでした。

岩田准教授が研究対象としたイエイツは、日本では『薔薇 イエイツ詩集』(角川文庫)、『イエーツ詩集』(思潮社現代詩文庫)、『対訳イエイツ詩集』(岩波文庫)など、翻訳出版されているのは詩が主たるものです。実際、1923年にノーベル文学賞を受賞したさいに公示された授賞理由も「高度に芸術的な形式で一国全体の精神を表現した、イエイツ氏の常に傑出した詩によって」という

18世紀アイルランド英語演劇への興味

博士論文を上梓した後、岩田准教授の研究の興味は時代をさかのぼって行くことになりました。19世紀後半にアイルランド独立運動が高まって以降、

方言英語を芝居の台詞に用いることは民族主義的な振る舞いであり、アイルランド訛りの英語は誇るべきこととされました。しかし、それ以前はどうでしょうか？ 事情は全く逆でした。方言英語は劣った出自を示す記号として、嘲笑の対象になっていたのです。

このことをよく表しているのが、17世紀以来イギリス演劇における道化役のひとつであった「ステージ・アイリッシュマン」の存在です。当時「プロウグ」(brogue)と呼ばれたアイルランド風の妙な英語を喋り、おつちよこちよいで乱暴で、失敗を繰り返してはイギリス人のご主人様を

ものでした。しかし、イエイツ自身はいつでも自分が劇作家でもあることを意識していました。ノーベル賞受賞講演で彼が選んだ論題は「アイルランド演劇運動」であり、その冒頭で彼は「私が演劇運動をしていなかったら、私の叙情詩に舞台上で語られる台詞のような性質がなかったら、ノーベル賞委員会の推薦すら得られなかったでしょう」と述べています。

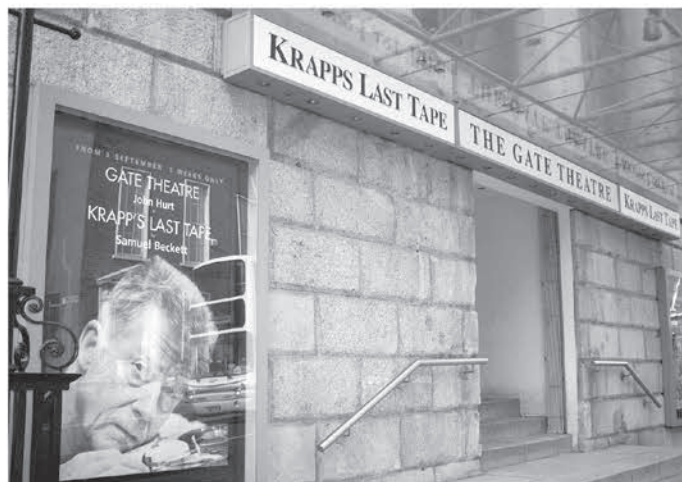
困らせるアイルランド人従者、というのがその基本的な役回りです。

ステージ・アイリッシュマンは一般に、イギリスの植民地支配によって生まれたアイルランド差別表象だと言われています。けれど、18世紀のロンドン演劇界にはアイルランド出身の劇作家や俳優たちが多数活動しており、この時代のステージ・アイリッシュマンはアイルランド人によって書かれたものも少なくなかったのです。岩田准教授は、ロンドンの観客の好みに迎合し、自らを卑下することにもなりかねない間抜けなアイルランド人をおもしろおかしく描き、演じた彼らの胸中にあったものは一体何であったのか、ということに強く興味を惹かれたと言います。

こうした「アイルランド人の手になるステージ・アイリッシュマン」を含む喜劇のなかでもとりわけ複雑な構造をもっているのが、ジョージ・ファーカー(1678-1707)による『伊達男たちの策略』という喜劇でした。



岩田准教授が通っていたダブリン市のトリニティ・カレッジ(正門)



岩田准教授が足繁く通ったダブリン市内の劇場、ゲイト座

■The Beaux' Stratagem(『伊達男たちの策略』)
からの引用

Aimwell. Sir, I have other Evidence—Here, Martin, you know this Fellow.

Enter Archer

Archer. (In a Brogue.) Saave you, my dear Cussen, how do's your Health?

Foigard. Ah! upon my Shoul dere is my Countryman, and his Brogue will hang mine.

▼岩田試訳

エイムウェル 他にも証拠はあります——お入り、マーティン。この者をご存じでしょう。

アーチャー登場

アーチャー(アイルランド訛りで)おぼんでがす、おらのでえじな親族よ、ちょうすはどうだべね?

フォワガル ああ、えれえこった、同国ずんでねえか。あのヤロコの訛りで、おらの訛りもばれちまうよ。

Aimwell. Stay, my dear Archer, but a Minuite.

Archer. Stay! What, to be despis'd, expos'd and laugh'd at—No, I would sooner change Conditions with the worst of the Rogues we jus now bound, than bear one scornful Smile from the proud Knight.

▼岩田試訳

エイムウェル まってくれ、大事なアーチャー、ほんの一分でもいい。

アーチャー 待てだと!何のためにだ?軽蔑され、正体を暴かれ、笑いものになるためか——嫌だね、俺がたった今縛り上げた悪党のうちでも一番下劣な奴と立場を交換した方がましさ。あの高慢ちきなナイトの軽蔑混じりの微笑に耐えるくらいなら。

THE
Beaux Stratagem.

A
COMEDY.

As it is Acted at the
QUEEN'S THEATRE
IN THE
HAY-MARKET.

BY
Her MAJESTY's Sworn Comedians.

Written by Mr. Farquhar, Author of the Recruiting-Officer.

LONDON:

Printed for BERNARD LINTOTT, at the Cross-Keys next
Nando's Coffee-House in Fleetstreet. 1757

ジョージ・ファーকার『伊達男たちの策略』の初版タイトル・ページ

この作品の主筋は、アーチャーとエイムウェルという二人の放蕩者が、ロンドンで食い詰めたので田舎で結婚詐欺をはたらくというものです。エイムウェルは詐欺の相手に真剣に恋をして前非を悔い改め、おかげでアーチャーと喧嘩になってしまいましたが、最終的には二人とも放蕩稼業から足を洗います。この戯曲は18世紀後半に流行した感傷喜劇のはしりと言われていますが、作中にはセンチメンタリズムとは直接関係のない不可思議なキャラクターが混じっています。

二人の放蕩者は、フォワガルという在英フランス軍付き神父と同居するのですが、彼が喋る妙な英語から二人は瞬時にこの「自称フランス人」の神父がアイルランド人の変装であることを見抜き、神父を脅して結婚詐欺に協力させようとするのです。イギリスの「臣民」でありながら敵国フランスに協力するのは反逆罪だという脅しの決定打になるのはアーチャーの大芝居です。彼がプロウグでフォワガルに話しかけると、フォワガルはあっさり尻尾を出してしまうのです(引用上段参照)。

しかし、何故ロンドンの小粋な伊達男が、アイルランド人も舌を巻くほど流暢なプロウグを操れるのでしょうか?その点について、作者ファーカーは何の説明もしていません。岩田准教授は、作品の背景を探り、初演時にアーチャーを演じたのが、ファーカーの同郷の親友だったアイルランド人俳優ロバート・ウィルクスであったことが、理由のひとつではないかと考えています。

とすれば、アーチャーがエイムウェルに比べ、社会から疎外されることへの危機感をずっと強く持っており、ひとりだけ「良い子」になったエイムウェルを激しく責める(引用下段参照)という場面の持つ意味もはつきりしてきます。伊達男役のはずのエイムウェルは、実は道化役のフォワガルと大いに似た人物なのです。ともに、社会から疎外される危機感を強く持ち、作中では決して明かされない謎を秘めているのです。そして、その後にあつたのは、ロンドン演劇界のためにはたらくアイルランド人たちが共有していたであろう、「自分たちもフォワガル同様に一種の国籍詐称者だ」という気持ちだったのではないか——岩田准教授はそう論じています。

■ *The Brave Irishman ; or, Captain O'Blundner*
 (『勇敢なアイルランド人』)からの引用

CAPTAIN. And so you tells me, Cherjeant, that Terence M'Gloodterry keeps a Goon?
SERGEANT. Yes, Sir.
CAPTAIN. Monomundioul! but if I catches any of these Spalpeen Brats keeping a Goon to destroy the Game, but I'll have 'em chot first, and phipt thorough the Regiment afterwards.
SERGEANT. One wou'd think that they should be whipp'd first, and then shot.
CAPTAIN. Well, is'nt it the same Thing? Fat the Devil magnifies that?— 'Tis the same Thing in the End, sure, after all your Cunning, but still you'll be a Wiseacre: But that Terence M'Gloodterry is an old Pocher, he shoots all the Rabitts in the Country to stock his own Burrough with 'em.

Enter a MOB who stare at him

1st MOB. Twig his Boots.
2nd MOB. Smoke his Sword,&c.&c.
CAPTAIN. Well, you Scoundrels, did you never see an Irish Shentleman before?

▼『ポストコロニアル批評の諸相』からの引用

大尉 んだば、軍曹よ、テレンス・ムグラッデリーは銃を持っとるだか?
軍曹 左様で。
大尉 コン畜生! ああいうロクデナスのガキが銃なんぞ持って獵場を荒らしてるのをとつかまえたなら、まんず撃っちゃ殺して、そいから連隊中鞭打ちにしてやっべな。
軍曹 通常は、鞭打ちが最初で、それから銃殺でしょうな。
大尉 同じこっちゃないかね? 誰がんなこと大きくすっべ。お前さんがどんなに知恵があらうと、学者さんだらうと、同じこったよ。それにすたって、あのテレンス・ムグラッデリーの野郎は密獵の常習犯だべから、国中の兎を自分の町に貯め込むつもりだんべ。
 野次馬登場、大尉をまじまじと見る
野次馬その一 あいつの靴を見ろよ。
野次馬その二 あいつの剣を見ろよ。云々
大尉 おい、ボデナスども。アイルランド人の紳士を見たこたあ無いべか?

ファーカーのメッセージを継ぐ者たち

こうした作劇法には、同士たちに宛てた符号のようなはたらきが含まれていると言えましよう。そして、その暗号めいたメッセージはたしかに伝わっていたと、岩田准教授は考えています。

ファーカーより半世紀遅れて生まれたトマス・シェリダン(1775-1812)は、ダブリンで役者兼劇場支配人をしていた人

物ですが、彼は自分の劇場で繰り返し『伊達男の策略』を再演し、しかもほとんどの場合、自らアーチャーを演じていました。のちに彼は経済上の問題もあってロンドンに移住するのですが、渡航の際に彼が携えていた戯曲『勇敢なアイルランド人』は、やはりステージ・アイリッシュマンの伝統をパロディ化したものだったのです。

2008年に東北大学出版会から出た『ポストコロニアル批評の諸相』所収の「一八世紀の英国演劇におけるアイルランド人表象」という論文で、岩田准教授はこの笑劇の主人公オブランダー大尉(どじばかりするアイルランド人といった意味の名前)が操る英語を詳細に分析しています。

これによれば、大尉は摩擦音と閉鎖音の区別を苦手としており、「c」や「g」の子音を「ch」や「gh」のように発音するため、*gentleman* が *cherjeant*, *gentleman* が *shentleman* となっています。また、長母音と短母音の区別もあり



岩田准教授のシェリダン論も収められた『ポストコロニアル批評の諸相』

まいで、*gun*は*goon*となっています(引用参照)。しかし、こうした発音上の特徴は、*goon*を*shoun*と発音するフォワガルの例(前ページ引用上段参照)にも見られるように、先人たちによって確立されたものであったのです。

もちろん、これらステージ・アイリッシュマンたちの語る英語は、真正なアイルランド方言ともまた異なるものであり、観客に違和感とおかしみを与えるために誇張されています。なお、岩田准教授は、日本語論文でこれらの違和感を読者に感得してもらうための試みの一環として、ステージ・アイリッシュマンたちの台詞を、東北方言に似た(ご本人は「なんちゃって東北弁」と自称しています)架空の方言を用いて翻訳しています。

ただし、トマス・シェリダンがファーカーと異なるのは、舞台用のアイルランド方言にどのような含意を持たせたか、ということとです。これについて准教授は、次のように論じています。「このように、考え得る限りのアイルランド方言を意図的に混在させた彼の発話は、もちろん誇張されたステージ・アイリッシュであり、この初登場の場面、オブランダー大尉はダブリンの観客にとってすら一種の違和感を醸し出していたのではないかと推測される。しかし、無

PUFF. [...] the day before it is to be performed, I write an account of the manner in which it was received—I have the plot from the author,—and only add—Characters strongly drawn—highly coloured—hand of a master—fund of genuine humour—mine of invention—neat dialogue—attic salt! Then for the performance—Mr. DODD was astonishingly great in the character of SIR HARRY! That universal and judicious actor Mr. PALMER, perhaps never appeared to more advantage than in the COLONEL;—but it is not in the power of language to do justice to Mr. KING!—Indeed he more than merited those repeated bursts of applause which he drew from a most brilliant and judicious audience! As to the scenery—The miraculous power of Mr. DE LOUTHERBOURG's pencil are universally acknowledged!—In short, we are at a loss which to admire most,—the unrivalled genius of the author, the great attention and liberality of the managers—the wonderful abilities of the painter, or the incredible exertions of all the performers!

▼岩田試訳

バフ [...]初演の前日に、わたしはもう劇評を書いてしまうのです。粗筋は作者から聞いておき、こう加えるだけです。力強い人物描写——とても生き生きしている——たくみの技だ——本物のユーモアの倉庫——斬新な創意工夫の鉱脈——気の利いた会話——頭脳にいい刺激!で、演技についてはこんな感じです。ドッド氏が演じたサー・ハリーは驚異的に良かった!人に知られた知性派のパーマー氏が、コーネルほどの当たり役を取ったことは無かったかもしれない。しかし何より、キング氏を正當に評価するのは、ことばの力の及ぶところではない!実際、才氣にあふれ目の肥えた観客から、彼がくり返し引き出した拍手喝采の嵐ですら、その功績を充分に表しているとはいえない!舞台美術に関しては、ドール・テルブル氏(Doyle)の絵筆が持つ奇跡の力は、すでに誰もが認めているところでありましょう!——とどのつまり、どこを一番に誉めるべきか、途方に暮れてしまう。作者の比類なき才能か、マネージャーたちの細心の注意と気前の良さか、はたまた画家の驚異の能力か、それとも役者たちの信じがたいほど素晴らしい演技か!?……ってね。

骨ざと非標準英語を誇張して描かれているが故に、大尉が最後に見せる雅量(ようりやう)は、希有の美德(とく)として強調されるのである。』と。トマス・シェリダンは、嘲笑(ちょうしやう)の対象だったアイルランド方言を、有徳(とく)のことばとして再生させ、その価値を逆転させてみせたのです。ただし、このような逆転は、短い笑劇(しょうげき)のなかでのみ可能なものでした。シェリダンのうちに、スコットランド人やアイルランド人相手に、ロンドンで成功するための「美しい英語」の教師として働き始め、発音記号付きの英語辞書や、発音に特化した英語教則

R・B・シェリダンの研究へ

本を出版するようになります。方言英語を喋(しゃべ)るものがイギリス社会で被る不利益を身にしてみ感じていたトマス・シェリダンが、オペランダー大尉のように生きることがついに叶わぬ夢だったのです。

トマス・シェリダンの息子、R・B・シェリダン(1751-1816)もまた、若いころから劇作家兼劇場支配人としてロンドンの演劇界に生きた人物です。しかし、幼い頃

からイギリスで暮らしたR・B・シェリダンは、父とは異なり、あからさまなアイルランド方言を自作に書き込んだりすることはありませんでした。けれど、岩田准教授の考えでは、シェリダンの芝居にもどうも時代(じだい)の要請(ようせい)とはずれた、独特の特徴があるのだということです。

18世紀後半のロンドン演劇界では、大道具の進歩と共に急速なスペクタクル化が進みました。芝居は「聞くもの」ではなく「見るもの」へと変わって行き、有名な劇場は次々と改築をして、より多くの観客を収容でき

る大がかりな舞台を作ったのです。そのような時代にあつて、R・B・シェリダンは何故か、奔流(ほんりゅう)のように溢れ出すことばの芝居、話芸(わげ)の芝居を作ることになりました。

『批評家』(1779)という彼の笑劇には、バフという男が自らのいんちき劇評家ぶりを臆面もなく披露する場面があります(引用参照)。バナナの叩き売りのようなこの名調子は、初演時の俳優や大道具方の実名を交えた楽屋落ちのギャグになっており(キング氏というのが、バフを演じている役者の名です)、古き良き時代の口承文芸を彷彿とさせる名場面です。

また、シェリダンは同じく当時台頭してきた活字出版文化に迎合することもせず、自らの戯曲(ぎきく)を出版することをなかなか許しませんでした。彼は何故、オーラル文化にこだわりの、活字／スペクタクル文化に参入しようとしなかったのでしょうか。そこには、彼のアイルランド文化への帰属意識(きぶくしゆいし)と何か関わりがあるのでしょうか。今、岩田准教授はその点に大きな関心を抱き、R・B・シェリダンの研究を深めようとしています。

ところで、ここに挙げた准教授による私訳の台詞は、いずれも日本文学会や日本文学会東北支部における口頭発表で、准教授自身が聴衆を前に読み上げたものばかりです。「こうした台詞は口頭発表では非常にうけるんですが、その後論文として活字にすると反応が薄いんです。わたし自身、シェリダンに似た、直接人に語りかける演劇性を大事にしているから、そうやってしまふのかも知れません」と、岩田准教授は自己分析しています。

東北大学は1907年(明治40)6月22日に創立し、文学部の前身である法文学部は1922年(大正11)に開設されました。2011年、東北大学も3.11東日本大震災の被害を免れませんでした。新たな防災・減災科学の確立、次代の社会システム構築をめざす、文学部・文学研究科の動向にご注目ください。

文学部へ行こう

【ニュース1】 2012年度の始まり

3・11を乗り越えての、晴れがましい卒業式、入学式

2011年春は、3・11の影響により、卒業式も入学式も簡素なものでした。しかし、復旧・復興が進んだ2012年春は、3月27日の卒業式(学位授与式)も、4月5日の入学式も、仙台市体育館を会場に例年通りの晴れがましい式典となりました。

入学式では、第21代総長に就任した里見進総長が、祝辞で「東北大学は、社会の要請に応える人材を育成するため、変わらぬ理想とともに、

変わり続ける勇気をもって挑戦を続ける大学であることを強調し、人間的力あふれる社会のリーダーを育成するため、その素養の土台となるリベラルアーツを充実させ、社会の要請に応えるべく変革を続けて行かねばならない」という理念を述べました。

里見総長は、<「友だちは第二の自己である」は、「万学の祖」とも呼ばれる古代ギリシャの哲学者、アリストテレスの言葉です。人は一人では生きていけません。皆さんがこれからの学生生活の中で、生涯の師、友人と出会い、人生をより豊かに生きられんことを願っています>という言葉によって新入生を励ましています。



卒業式(学位授与式)では、各学部の代表者が壇上に並びました。右端3名が文学部の代表者です



新入生歓迎セミナーでは、佐藤嘉倫教授が講演

入学式に続いて行われた歓迎セミナーでは、東北大学で学ぶことの魅力を全学の新入生に語り伝える講演が行われ、その講師を、文学研究科・佐藤嘉倫教授(行動科学)が、電気通信研究所・大野英男教授とともに務めました。

佐藤教授は「人間関係は犯罪を防げるか?—東京を事例として」と題して、東京の下町に生まれた自身の環境にふれながら、共同体における人間関係の力を肯定し、キャリアに対する柔軟な心と態度でチャンスをものしようにと語りかけました。



ニュース2

東日本大震災への対応

防災科学研究拠点から、防災・減災・復旧・復興に向けて

2011年3月11日に東北・関東の太平洋沿岸地域を襲った地震・津波の大災害に対して、東北大学の研究者はさまざま分野を超え、部局の垣根を超えて東北大学防災科学研究拠点に結集し、調査・研究に着手しました。2011年4月、6月、9月、2012年3月には、それぞれ震災が起こってから1カ月後、3カ月後、6カ月後、1年後の報告会を開き、調査・研究の成果を発表しました。

文学研究科では、阿部恒之教授（心理学）、原聖准教授（科学哲学）が防災科学研究拠点の活動に参画しています。阿部教授は、被災者の心

理、行動、マナーについて、調査と考究を重ね、「震災1カ月後緊急報告会」以降継続して、その調査、考究



2012年3月11日開催の1年後報告会

の結果を報告しています。原准教授は、カフェ「震災を忘れず、忘れないために」の企画・運営に当たって、科学の専門家と市民とが対話する場を設けるとともに、市民の震災に対する意識調査も行っています。

文化財保護や、震災関連アーカイブの確立へ

東日本大震災への東北大学の具体的な対応の一例としては、文学研究科の教職員・学生も参加しての文化財保護活動があります。被災地の貴重な資料を救出し、整理・復旧するという誠に地道な活動が黙々

と進められています。

同時に、東北大学では、東日本大震災に関する記憶、記録事例、知見を収集し、国内外や未来に共有するアーカイブ創出をめざす「みちのく震録伝」の取り組みも行っています（事務局：東北大学災害科学国際研究所／URL：http://www.dccr.tohoku.ac.jp/archive/shinrokuden/summary）。

文学研究科では、阿部恒之教授がアドバイザーとして参画し、国内外の大学、国や県の機関、マスコミ、一般企業などの協力も得て、壮大なスケールのプロジェクトとなっています。

ニュース3

研究フロンティアから

G-COE研究で国際的連携も着々と

国際的競争力がある個性豊かな大学づくりを目指して、文部科学省により2007年度から「グローバルCOE」(G-COE)プロジェクトが進められています。

文学研究科では、2008年度から佐藤嘉倫教授を拠点長として「社会階層と不平等教育研究拠点の世界的展開」を推進しており、社会階層と不平等の構造と変動、V・H・M・I・N・O・R・I・T・Y・V・H・G・P・O・S・I・T・V・H・I・N・T・E・R・N・A・T・I・O・N・A・L・M・O・V・E・M・E・N・T・V・H・E・A・S・I・A・N・V・の5つの研究部門に

おいて、国内外の多くの大学との連携を深める中で、格差を生み出す社会的メカニズム、格差をもたらし影響、格差を是正する方策等について研究を行っています。次々と開催されるビジネスミートイング、ワークショップ、研究報告会・講演会等を通して、研究成果の深化、発展と検証が着々と進められています。



東北大学・シンガポール国立大学合同フォーラム(2009年2月18・19日、シンガポール国立大学)



国際シンポジウム 第3回アジア若手研究者による社会学的探求のフロンティア(2009年3月13日、韓国延世大学)



東京セミナー「教育の経済学的展望」(2012年3月4日、アカデミーヒルズ)

青春のエッセー 阿部次郎記念賞 第6回作品募集中

阿部次郎記念賞を設け、全国の高校生(高専1〜3年生も含む)の作品を募集する「青春のエッセー」は、2012年度で第6回を迎えます。

課題作品の課題は「再生」。ゲスト選考委員は、高橋克彦さん(江戸川乱歩賞、直木賞作家/盛岡市在住)です。9月30日原稿締め切り、

11月3日発表の予定です。

全国の高校生の皆さんの応募をお待ちしています。問合せ先・阿部次郎記念賞運営委員会事務局(<http://www.sal.tohoku.ac.jp/abe/p945.html>)

なお、2011年度は、129点の作品の応募をいただき、選考の結果、

[2011年度の選考結果]

課題作品の部 課題「希望」

●最優秀賞

「灯火」

星 結衣さん(福島県立郡山東高等学校1年)

●優秀賞

「絶体絶命」

石川 里奈さん(宮城県>秀光中等教育学校6年)

「希望を見た、夢をみた」

岡部 達美さん(東京都立田柄高等学校3年)

自由作品の部

●最優秀賞

「ただの口内炎」

柏木 辿さん(長野県松本県ヶ丘高等学校3年)

●優秀賞

「彼女の世界」

金 春喜さん(千葉県>市川高等学校2年)

「『響き』への願い」

伊藤 響さん(宮城県佐沼高等学校3年)

●学校賞

長野県松本県ヶ丘高等学校

岐阜県立岐阜聾学校



第5回 阿部次郎記念賞 入賞作品集
(2012年3月1日発行)

7月30日・31日、オープンキャンパス開催

7月30日・31日、恒例の東北大学全学オープンキャンパスが開かれます。毎年、全国の高校(一部中学生も参加)から数万人が参加する、国公立大学最大のオープンキャンパスとなっています。

文学部では、今回も両日とも午前、午後に分けて、川内北キャンパスのA棟・B棟の2箇所ですて文学部案内、

公開講義を行います。自由に研究室訪問もできます。日程および公開講義題目は、表のような予定となっています。



青春のエッセー 作品集の中国語版発刊

2011年9月には、第1〜3回作品中31編を収めた中国語版の作品集が、『思考の青春』のタイトルで上海の出版社(山東文藝出版社)から刊行されました。上海外国語大学の日本語・日本文学の研究者が校閲を行っています。日中両国の相互理解につながることも期待されます。



左記のように受賞者・受賞作品受賞校が決まりました。第1〜5回の作品集はまだ若干の在庫がありますので、事務局宛てにお申し込みください。



リベラルアーツサロン(2012年度前期)

会場：せんだいメディアテーク

問合せ先：☎022-217-4977(東北大学広報課)

6月8日 ●伝統芸能をテクノロジーで未来に伝える 教育情報学研究科・渡部信一教授

7月13日 ●神話と首狩の宗教民族学 文学研究科・山田仁史准教授

9月14日 ●「気になる」子どもと発達障害 教育学研究科・本郷一夫教授

有備館講座(第11期)

会場：大崎市岩出山公民館・松山公民館

問合せ先：☎0229-72-0357

(大崎市岩出山公民館スコーレハウス)

5月12日 ●地域の文化を芝居にしよう!

ーイギリスとアイルランドにおけるコミュニティ・ドラマー
英文学・岩田美喜准教授

6月16日 ●中国の村落における地域のつながり、祖先とのつながり

文化人類学・川口幸大准教授

7月21日 ●戦国時代東北の「地域」ー新発見「遠藤家文書」から見るー

日本史学・柳原敏昭教授

8月11日 ●地域の自治と自立を考えるー社会学の視点からー

社会学・永井彰教授

9月15日 ●三蔵法師玄奘が学んだナーランダーの地域と大学

インド文化学・吉水清孝教授



2011年度講座にて
日本史専攻分野 大藤修教授

**公開講座に
お出かけください**

文学研究科・文学部では、今年も、リベラルアーツサロンとともに、有備館講座、齋理蔵の講座を開催します。有備館講座、齋理蔵の講座はともに、「地域再考」をテーマに、地域再興を期して、私たちの命と心を支える「地域」のあり方を改めて問い直します。

齋理蔵の講座(第5期)

会場：丸森町・齋理屋敷

問合せ先：☎0224-72-3036(丸森町教育委員会・生涯学習班)

6月2日 ●失われた遺跡の再発見
考古学・鹿又喜隆准教授

7月7日 ●死者の記憶と世代の継承
心理学・辻本昌弘准教授

8月4日 ●中国の思想と宗教における広東
中国思想・齋藤智寛准教授

9月1日 ●外国人とともに生きる
ー地域における共生を考えるー
行動科学・永吉希久子准教授

10月6日 ●一条の光
倫理学・戸島貴代志教授

11月3日には、東北大学植物園をメイン会場として、文学研究科と植物園との共催で紅葉の賀が開かれます。2005年に始まったこの催しも恒例の行事となり、今年で八回目を迎えます。

2011年度は、3・11東日本大震災の影響も乗り越え、例年どおりに開催されました。俳句会、野点、尺八演奏、植物園内ガイド付き散策も例年どおり行われ、青春のエッセー阿部次郎記念賞のゲスト審査員である森まゆみさん(作家)による



「辛酸、佳境に入るー東北を歩いて考えたこと」の講演、青春のエッセー選考結果報告会も開かれました。

11月3日、東北大学植物園で「紅葉の賀」

インフォメーション 4

<文学部のオープンキャンパス日程>

7月30日(月)

		A棟	B棟
午前	10:00 ~ 10:10	あいさつ 大淵憲一学部長	座小田豊副学部長
	10:10 ~ 10:40	文学部案内 佐藤嘉倫教授	小野善彦教授
	10:40 ~ 11:40	公開講義 黒岩卓准教授 (フランス語フランス文学)	堀裕准教授 (日本史)
午後	13:30 ~ 14:00	文学部案内 泉武夫教授	阿子島香教授
	14:00 ~ 15:00	公開講義 田中重人准教授 (日本語教育学)	尾崎彰宏教授 (美学・西洋美術史)

7月31日(火)

午前	10:00 ~ 10:10	あいさつ 大淵学部長	森本浩一副学部長
	10:10 ~ 10:40	文学部案内 小野教授	佐藤教授
	10:40 ~ 11:40	公開講義 川口幸大准教授 (文化人類学)	三浦秀一教授 (中国思想中国哲学)
午後	13:30 ~ 14:00	文学部案内 阿子島教授	泉教授
	14:00 ~ 15:00	公開講義 永吉希久子准教授 (行動科学)	小林隆教授 (国語学)

<公開講義の題目>

黒岩卓准教授：「トリスタンとイゾー」物語群における恋と秩序

堀裕准教授：死からみた天皇の歴史

田中重人准教授：機会の平等はなぜ実現しないのか

尾崎彰宏教授：芸術、そして生きること

川口幸大准教授：あなたの大切な人は誰ですか？ー家族を考える

三浦秀一教授：東北大学図書館新着「武内文庫」と『孝経』

永吉希久子准教授：「平等な社会」の実現はなぜ困難か？

小林隆教授：方言は歴史を語る



東北大学出版会外観
(旧片平学生診療所)

■2011年3月以降の東北大学出版会の実績

Gender Equality in Asia: Policies and Political Participation 辻村みよ子、ジャッキー・スティール編 2011年3月
高等教育ライブラリ1 教育・学習過程の検証と大学教育改革 東北大学高等教育開発推進センター編 2011年3月
高等教育ライブラリ2 高大接続関係のパラダイム転換と再構築 東北大学高等教育開発推進センター編 2011年3月
自然科学総合実験 2011 東北大学自然科学総合実験テキスト編集委員会編 2011年3月
共感と感応—人間学の新たな地平— 栗原隆編 2011年4月
人体はすべて機械化できる?—人工臓器医学講座入門— 山家智之 2011年4月
マイクロサット開発入門 東北大学超小型衛星開発チーム 2011年4月
介護職の誕生—日本における社会福祉系専門職の形成過程— 白旗希実子 2011年4月<若手研究者出版助成採択作品>
農学生命科学を学ぶための入門生物学 山口高弘、鳥山欽哉編 2011年5月
社会的責任学入門—環境危機時代に適応する7つの教養— 東北大学生態適応GOEチームPEM 2011年6月
日中対照 デジタル信号処理入門 城戸健一著、周立剛編訳 2011年7月
New Frontiers in Social Cognitive Neuroscience 川島隆太、杉浦元亮、月浦崇編 2011年8月
がんの予防 狩野敦 2011年8月
生物光子による生体情報の探求 稲場文明、清水慶昭 2011年9月
川端康成の方法—二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成— 仁平政人 2011年9月<若手研究者出版助成採択作品>
修羅とデクノボー—宮沢賢治とともに考える— 滝浦静雄 2011年10月
高度情報化時代の「学び」と教育 渡部信一監修 2011年11月
シベリアとアフリカの遊牧民—極北と砂漠で家畜とともに暮らす— 高倉浩樹、曾我亨 2011年12月
東北アジア 大地のつながり 石渡明、磯崎行雄 2011年12月
死すべきものの自由—ハイデガーの生命の思考 信太光郎 2011年12月<若手研究者出版助成採択作品>
History of National Curriculum Standards Reform in Japan—Blueprint of Japanese citizen character formation— 水原克敏 2011年12月
戦争と人道支援—戦争の被災をめぐる人道の政治— 上野友也 2012年1月<若手研究者出版助成採択作品>
つながりの文化人類学 高谷紀夫、沼崎一郎編 2012年2月
日本医学教育史 坂井建雄 2012年2月
「三合語録」における満州文字表記モンゴル語の研究 スチンバト 2012年2月
アジアにおけるジェンダー平等—政策と政治参画— 辻村みよ子、スティール若希編 2012年3月
住宅における熱・空気環境の研究 —快適・健康な省エネ住宅の実現を目指して— 吉野博 2012年3月
東日本大震災と大学教育の使命 東北大学高等教育開発推進センター編 2012年3月
高等学校指導要領V5大学入試 東北大学高等教育開発推進センター編 2012年3月
建築遺産 保存と再生の思考—災害・空間・歴史 野村俊一、是澤紀子編 2012年3月
今を生きる—東日本大震災から明日へ! 復興と再生への提言—1 人間として 座小田豊、尾崎彰宏編 2012年3月

創立16年目、東日本大震災以後の東北大学出版会に注目

東北大学出版会は、1996年11月、東北地方唯一の学術専門出版社として発足しました。以来、刊行作品は教職員・同窓生の研究書をはじめ、広く学外、国外の研究者の研究書にまで及び、教科書を含めて250点以上に至っています。

この出版会の活動にも、3・11東日本大震災は大きな影響を及ぼしました。

一方では、地震により事務局の書棚が倒れたり、積み上げていた出版物が崩れたりする被害がありました。片平キャンパスのリニューアルもあり、(同じ敷地内ですが)出版会は事務局を移転しました。

他方では、これを機に出版会の活

動が一段と活発になりました。2011年3月以降、別記のような出版が行われ、人文社会科学から自然科学まで、多様な分野にわたっての研究成果が発表されています。

文学研究科関連では、滝浦静雄名誉教授(文学部卒/1971-89年在籍/2011年6月死去著『修羅とデクノボー—宮沢賢治とともに考える—』、沼崎一郎教授(文化人類学)共編『つながりの文化人類学』、座小田豊教授(哲学・尾崎彰宏教授(美学・西洋美術史)編『今を生きる—東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言—1 人間として』が出版されています。

3・11の経験を取り越えていくために『東日本大震災と大学教育の使命』の発行

この中でも、やはり、東日本大震災関係の著作は見逃すことができません。

その一つは、帯に「大学は、災害時にどんな役割を果たせるのか?そして今後どのような人材を育てるべきか?」をうたった、東北大学高等教育開発推進センター編『東日本大震災と大学教育の使命』です。

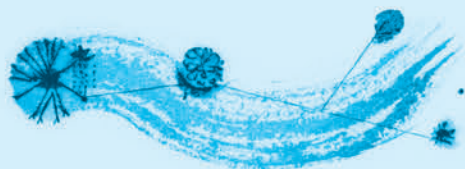
東日本大震災が大学に与えた影響、そして震災後の復興支援活動の実態とその大学教育への展望等の現況を広く社会に発信することは、

大学関係者のみならず国民全体の問題意識にも応えるものであろうと考える。(本島明博センター長のはじめに下り)

との意図から企画されたものであり、岩手大学、岩手県立大学、宮城教育大学、宮城大学、東北学院大学、東北工業大学、宮城学院女子大学、尚絅学院大学、山形大学が参画してまとめられています。

東北大学からは、文学研究科・野家啓一教授(哲学)が「大震災以後の科学技術と人材育成」を寄稿しています。





Carpe Diem(カルペ・ディエム)を シリーズ標語とする『今を生きる—東日本大震災から 明日へ!復興と再生への提言』シリーズの発行

もう一つは、前述の座小田豊教授・尾崎彰宏教授編『今を生きる—東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言—1 人間として』です。

「震災による死者たちの記憶を風化させることなく、確かなものとして留める」(東北大学出版会・久道茂理事長の「巻頭言」より)ために、『Carpe Diem 今を生きよう』をシリーズ標語とし、『今を生きる—東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言』をシリーズタイトルとする、全5巻シリーズの出版が企画されました。



■『今を生きる—東日本大震災から明日へ!復興と再生への提言—1 人間として』の執筆陣

まえがき—「人間として」問いかけること
座小田豊教授(哲学)
「今を生きる」ということ
野家啓一教授(哲学)
死者からのまなざし—生きること・生かされること
佐藤弘夫教授(日本思想史)
宮城の海浜風景—その宗教的意味について考える
長岡龍作教授(東洋・日本美術史)
「縁」—御伽草子『ものくさ太郎』に学ぶ
佐倉由泰教授(国文学)
語ることは「いま」を生きること
名嶋義直准教授(日本語教育学)
東日本大震災で体験したこと、感じたこと、考えたこと
阿部恒之教授(心理学)
東日本大震災時の土葬選択にみる死者観念
鈴木岩弓教授(宗教学)
日本人と震災と宗教
木村敏明准教授(宗教学)
己の而今
戸島貴代志教授(倫理学)
精神の生活—「喪われた者たち」の「記憶」と「ふるさと」の根源的な力について
座小田豊教授
あとがき—終わりにき聞いの始まり
尾崎彰宏教授(美学・西洋美術史)

と経済(法学・経済学から)、第3巻「自然と科学」(工学・理学・農学から)、第4巻「医療と福祉」(医学・福祉学から)、第5巻「教育と文化」(教育学から)が予定されています。

第1巻「人間として」の「まえがき」を担った座小田豊教授は、東日本大震災から一年が経とうとしている。あの日の、そしてあの日に続く日々の記憶、そして哀しみはいまなお実に鮮明である。その記憶を思い起こすことによってこの「まえがき」を書き進めたい。そこに刻まれた諸々の意味を掘り起こすことが今は不可欠な作業だと思われるからである。

と書き起こしています。そして、シ

リーズの標語「Carpe Diem 今を生きよう」とは、古代ローマの詩人ホラティウスの「歌集 Carmina」を出典とするラテン語であり、「今日という日の稔りを刈り取れ」という意であることを述べた上で、

今日というこの日は、言うまでもなく、いのちが燃焼している現在のことである。それは日々の営みの連なりの一瞬でしかないにしても、その営みをあやまらず遂行するためには過ぎ去った日々の記憶が、それゆえ、共に生きた人たちとのいのちの繋がりの記憶が必要であろう。したがって、「今を生きる」には、己れの死を自覚すること(「死を思え!」)よりもむしろ、喪われた者たちと共にしたいのちの営みを想起することの方が大切になろう。と記しています。

以下、本書では、文学研究科の研究者が、文学・哲学・倫理学・宗教学

などの立場から上記のような論考を寄せており、第2巻以後のシリーズ続刊を大いに期待させるものとなっています。

2012年6月、 仁平政人氏、岡崎義恵 学術研究奨励賞受賞

「川端康成の方法—20世紀モダニズムと『日本』言説の構成—」を出版した仁平政人氏は、2009年に文学研究科国文学専攻分野を修了し、現在、弘前大学専任講師を務めています。この著作をはじめとする優れた研究が認められ、2012年6月16日、日本文芸研究会より第二十九回岡崎義恵学術奨励賞を受賞しました。岡崎義恵は、助教授・教授として東北帝国大学法文学部・文学部で教壇に立ち(在籍1923—55)、日本文芸学の樹立を提唱した国文学者で、日本文芸研究会の創設者でもあり、同賞は、岡崎博士の遺志と遺族の厚志を受けて1983年に設けられました。仁平氏は、その16人目の受賞者です。





大島正隆(1909-1944 写真右)は、1939年に法文学部を卒業すると副手として採用され、東北中世史研究の開拓者として将来を嘱望された研究者です。1944年に夭折しましたが、大島が中心となって進められた秋田家史料の整理作業は、2001年8月に「秋田家史料目録」(写真左)となって結実しました。

北から見た日本史・日本文化研究を支える 秋田家史料

2012年6月4日(28日)、東北大学附属図書館で2011年秋に続いて「清風一過―大島正隆の歴史学と民俗学―」と題する東北大学史料館企画展が開かれ、大島正隆が各地を歩いて記録した詳細な手帳やメモなどが展示されました。この大島が副手時代、精根を傾けて整理にあたったのが「秋田家史料」です。

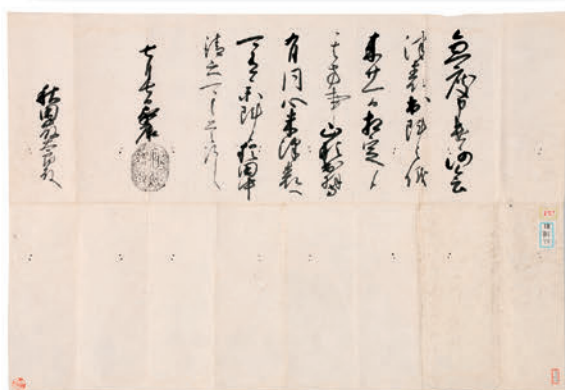
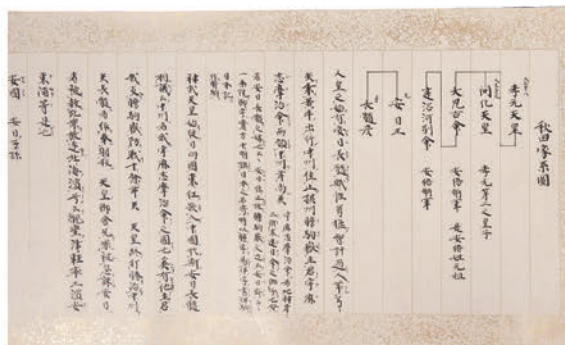
秋田家は、十三湊(青森県五所川原市)を拠点とし、鎌倉時代には蝦夷管領と呼ばれ、室町時代には「日之本將軍」を名乗った安東(または安藤)氏を祖としており、16世紀には戦国大名として秋田を領し、江戸時代に入ると、穴戸(現在茨城県笠間市)の藩主にもなりまが、長く三春(福島県三春町)藩の大名として、代々家を継承し、明治維新を迎えます。数百年もの歴史を持つ大名家であるために、所蔵史料もその長い歴史を反映したものとなっています。

東北大学を東北地方の歴史を研究する拠点としてと考えていた法文学部の喜田貞吉は、秋田家に働きか

け、1939年、国史研究室(現日本史研究室)内の奥羽史料調査部に史料の寄託を受けました。その後すぐに大島の手で目録作成が始まったのです。

史料は、「家文書」(系図、官位叙任等184点)、「領主文書」(秋田時代、穴戸時代、三春時代の図書等963点)、「蔵品」(目録類、名家筆跡等334点)に分類されました。家文書は、秋田家の祖先が前九年合戦で敗れた安倍氏の系譜に属することを示した系図、歴代当主の官位叙任や家督に関する史料、肖像画等、秋田家の自己認識にもかかわる重要な資料です。領主文書は、豊臣秀吉や徳川家康からの内書や知行目録をはじめ近世初頭の文書も数多く含んでいて、古文書研究を進める上でもたいへん有益です。

そしていま、この貴重な史料は東北大学附属図書館に所蔵されて、北からの日本史・日本文化研究の支えとなっています。



かつて秋田家が在城していた三春には城山が残り、菩提寺である高乾院、龍徳院のほか数多くの寺院も並んで、往時の城下の雰囲気を与えています。秋田家が受け継いできた貴重な史料は、三春初代藩主の父、秋田実季(1576-1659)が完成させた「秋田家系図」(写真上)、徳川家康が関ヶ原合戦時に対上杉合戦への参陣を求めた「徳川家康黒印状」(写真中)等の歴史史料、実季によって筆写された「三十六歌仙絵」(写真下)等の文学的資料をはじめ、内容も豊かです。なお、伊勢の歌は「散(り)ちらずきかまほしきをふる郷の花みてかへるひとあはなん」と詠まれています。